カラーボールライフ

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カラーボールライフ

【Ｎコード】
Ｎ７９７４Ｅ

【作者名】
ｔｋｋｏｓａ

【あらすじ】
何をやってもうだつが上がらない男にある日、相手の感情を読み取れる能力が身につき、それを機に更生していく物語。

第0話

人は自分が今日死ぬと分かっていたら、どうするだろうか。
貯金を全額下ろして、思うがままに使いまくる。ぞっこんのアイドルのコンサートに行って、ひたすら踊り歌う。無人島にでも向かって、ただ静かにそのときを待つ。家族や友人と何気ない時間を過ごして、仄かな心地良さを味わう。我を忘れて狂ってしまい、最悪の犯罪に手を染める者もいるだろう。
可能性は無限にある、それぞれの性格や趣味や環境によって答えは違ってくるから。
しかし根本の部分が問題だ、大部分の人間は自分が死ぬ日など知る由もない。朝起きたときに自らの死を悟る者など、自殺志願者や最末期患者ぐらいといえる。
それに、どちらかといえば「そんなもの知らない方がいい」とする者の方が多数派のはずだ。死ぬと決め込んで生きたくなんかない、なにかを諦めながら幸福のかぎりは掴めない。そこに後ろめたさや切事が生じるのは当然であり、誰だってそれを持っている。ネガティブを抱えながらポジティブを望む、現状の暗色を分かりながら未来の明色を乞う。
でも思った通りになんかならない、それが面白いという人間もいる。
中には遣る事為す事が全て反対方向に進んでしまう者もいるだろ

う。変わりたい、正反
対になってみたい、きっとそう願ってる。
　可哀相なぐらいに人生恵まれてない男に、ある日からそれを打開
する能力が備わったら
彼は喜ぶだろう。ならば叶えてみよう、彼にはこれまでのマイナス
をプラスに変える必要
がある。
　だが、もちろん世の中そんなにうまくは回らない。薬に副作用が
あるように、その能力
も彼に良いようにだけ活躍してくれるわけじゃあない。世の中には
見えなくてもいいもの
だってある、それを瞳にしたとき彼はどうするだろうか。
　彼にとって、劇的といえるほど移ろっていく日々がまもなく始ま
ろうとしている。

第０話（後書き）

全１０話、８作目になる作品です。

第1話

今日も日々となんら変化のないシーンが流れていく。
満員電車に押し潰されそうになり、スーツを着た人ごみに馴染みきったように紛れている。どこその工場のベルトコンベヤーのように、連続的に会社員たちは運搬されていく。
やっている仕事の内容は違えど、会社に向かう彼らの顔色はどれも似たようなものだ。
彼らの中で、ふとした道端に咲いた一輪の花に感動を覚える人間はどれほどいるだろう。
それなりの花好きでもなければ、ただ「花が咲いた」としか思いはしない。
彼らの中で、小さい頃に抱いた夢を叶えた人間はどれほどいるだろう。答えは「ほぼ０％」
といえる、ただ負け組になったわけじゃない。勝ち組になるために夢を諦めた、夢を追ったままでは負け組になることを悟って。最後に笑えばいい、そのために彼らはシフトチェンジを選択したまでだ。
ただし、誰もが勝てるわけでもない。負ける人間がいるから、勝てる人間がいる。彼らは敗者にならぬよう、毎日を必死に紡ぐように生きている。しかし紡いだ先に勝利がないのも漠然と分かっている、それでも日々を繰り返す。

フウッ、苅部健一は慣れたように溜め息をついた。彼ほどその姿が似合う人間も珍しい
だろう、あまりにもその画は馴染んでいる。晴れた空もくすんで見える、彼の瞳や心が淀
んでしまっているから。
まぁその気持ちも分かる、あんな毎日を過ごしていればこうもなるだろう。寝癖を直し
ただけの髪、覇気のない顔、生気のみなぎらない体、その様子はオーラに滲みでている。
個性もへったくれもない、普通人という言葉は彼のためにあるようだ。それに加えてのお
っちょこちょい、ミスばかりを繰り返す生まれながらの凡人。
学生時代からそれは如実になる、独りぼっちではなかったが親友といえる相手も少なか
った。チーム分けでチームメイトになった同級生からは煙たがられる、活躍しないのだか
ら当たり前ともいえる。係分けでは人気者だった、要は係のやる業務を全て彼に押しつけ
ればいいだけだから。不良グループの使いっぱしりはしょっちゅう、女子からの熱い視線
を受けることなど天地が返ろうともない。バレンタインで本命を貰ったことなんかなく、
義理から外されたこともある。
そんな乾いた人生だった、1日1日をなんとなく過ごすだけの。
ふと先の自分を考えてみることも多い、ただそこに明るい光は兆しすら見やれないが。

会社までの往路、苅部の頭の中といえば「今日1日をうまく遣り過ごすこと」を願うぐ
らいだ。なんとかミスをせずに普通に終われれば、彼にとってその

日は成功と位置付けられる。
ずいぶんレベルの低い成功だが、その設定は個々人によるものだから仕方ない。レベルの低い人生を泳ぐ中で、彼のハードルは次第に下がってきてしまったのだ。
会社のあるビルに着くと上を見上げてみる、２０階建てのガラス張りの建築物の迫力にやられそうになる。
また息をつく、逃げる勇気さえなく歩を進めていく。
「おはようございます」
おはようございます、同僚は彼を見やってから目線を合わすことなく挨拶を返す。
同僚からの挨拶に二言目はない、彼自身にそれをさせる度量がないから。社内の人気者でも来れば、あちこちから
「この企画、こうしたいんですけど目を通してもらっていいですか？」
「昨日飲みすぎちゃって、先輩強いですよねぇ」
だとか、苅部には投げられない「二言目」が送られるのに。
こんなことに関してはもう諦めている、望む方が間違いだろうとも思えてきた。大学を卒業して社会に出てからも彼の周囲の環境におけるポジショニングに変化はなかった。
２０階建てビルの１階分にある、社員３０人余の会社に苅部は就職した。数多くの会社を片っ端から受けまくり、唯一内定をもらえたのがここだった。まだ立ち上げて数年の会社で、これからが伸び盛りといえる。世界のヒット商品をいち早く取り入れ、街にある雑

貨店などに売り込む仕事だ。今はまだ小さい規模だが、良いものを扱っていけば良い店と
繋がれる。良い店に手を差し伸べられれば、会社もどんどん良くなっていけるはず。
　その中で苅部は財務部に配属になる、その配属は妥当といえた。彼に世界のヒット商品
を取り入れる知識もなければ、それを売り込む技量も持ち合わせていない。彼にはマニュ
アル通りといえる仕事をこなす、デスクワークがお似合いだ。

「まだ？　俺、もうすぐ出なきゃいけないんだけど」
「あぁ、すいません、ちょっと待ってください」
　先輩からの催促に苅部は気を焦らせる。
「はい、どうぞ」
「ったく、前もって出してるんだから用意しとけよ」
「すいませんでした」
　言い捨てるような愚痴に、苅部は身を縮ませる。お似合いであるはずの仕事ですら、彼
は定期的にミスを犯す。年下なら気を遣って待ってくれるが、年上からは容赦なく強い言
葉が飛んでくる。その度に気持ちは萎えて、「自分なんか」と己を卑下してしまう。はっき
り言って、この３０人余の社員の中で彼が最下位であることは間違いない。
　こんなことばかりの毎日に何があるんだ、そう考えたところで喜色に変わる答えなんか
見い出せないからやめる。
「これ、お願いしていいですか？」
「あっ、はい」
　差し出された領収書の上にある手のひらで、それが誰であるかは

すぐに判別できた。
馬瀬遥、社長秘書という名に劣りのない清廉とした佇まいは今日も健在だ。１６７ｃｍの長身にモデル並みのプロポーション、その体型に相応しい端麗な容姿。その体にまとうスーツは彼女を映えさせ、腰上あたりまで伸びるロングヘアも髪先まで手入れがされてあり艶もある。
その姿は眩しいほど輝いていた、正反対にいる苅部にはこうやって接していること自体が不思議なくらいに。
「じゃあ、お預かりしておきます」
なんでもない会話に、少し緊張が伴う。
「私は急いでませんから、いつでもいいですよ」
馬瀬はそう小声で呟き、フッと笑みを見せて去っていく。
さっきの先輩と苅部の掛け合いを目にした上での馬瀬の気配りの言葉だった。こんな自分なんかに気を掛けるなんて、どれほど出来た人間なんだ。３つも年下とは思えない、というより自分が出来なさすぎるからとも言えるが。

結局、この日は1時間半の残業をして帰路についた。仕事の遅い苅部には残業は友達といっていいほど着いて回るものだ。同じぐらいの仕事してるのに残業代がついて良いな、と嫌味をこぼされることもある。こっちだって好きで残ってるわけじゃない、と怒鳴ってやりたくなる。まぁ、そんな大それたことが彼に言えるわけはないが。

仕事帰り、苅部は焼き鳥屋「どうよ」に寄る。カウンター席と3つのテーブル席、地域
密着型といえる小さめの店だ。ただ地元の人間ばかりが集まるので、ワイワイと賑やかで
活気はある。誰も彼も何度と顔を合わせたことのあるので、彼にとってもホーム感覚のあ
る和む場所だった。
「まぁた残業か、そんな仕事が好きか？」
「好きなわけないでしょ、やらなきゃなんないからやってるだけだよ」
カウンターの向こう側で焼き鳥を焼いているのが番野功是、苅部の幼なじみだ。
オーダーされた焼き鳥の串を何本と焼きながら、2人の会話は続く。小さい頃からのよ
しみだろうが、彼だけはうだつの上がらない苅部の側にいてくれた。苅部に何かあったと
きは手を貸してくれる、唯一といえる親友だ。
「ほらよ、地鶏お待ち」
目の前に置かれた地鶏の焼き鳥を2串、ビールとともに口に入れていく。
焼き鳥屋「どうよ」は番野の父親が店長を務めている、従業員は父親と母親と番野と彼
の奥さんの4人。父親が始めたお店で、番野は2代目としてここを継ぐ予定だ。2年前に
結婚もして、店の奥にある自宅には8ヶ月になる子供が寝ている。
羨ましいかぎりだ、彼は苅部の出来ないことをあっさりとこなしていく。学生時代も勉
学こそ苅部と同等といえたが、運動神経はクラスで指折り。行動力や決断力など、何に置

いても勝る番野を苅部は誇らしく思っていた。
「いいよねぇ番ちゃん、こんな良いお店を継げてすごいよ」
「そんなことねぇよ、俺は元々あったものを引き継ぐだけだし。お前の方がすげぇって、ちゃんと就職試験とか受けまくって会社に入ったんだから。言うなら、俺は親のコネで会社に入れてもらったボンボンみたいなもんだぞ」
番野の言ってることは事実だが、素直に受け入れられる言葉ではなかった。きっと、彼は苅部と同じように就職試験を受けたとしても、苅部を上回る会社に入っていただろうから。
「それに、あんなかわいい奥さんと子供がいるしさ」
「まぁな、お前も良いのいねぇのか？」
「いるわけないでしょ、分かってるくせに」
こんな男、好んでくれる女性がいる方が珍しい。そんな女性が現れたら、良い男の判断基準が変化したのか、と疑ってしまうだろう。
「そうだな、お前の恋人になるなんて余程の物好きだろうな」
「ちょっと、番ちゃん」
ハハハッ、番野は失礼にあざわらう。場を和ませる上での失礼だとは長い付き合いで分かってるので、別にそれ以上に責めたりもしない。
「悪い悪い、でも健一はホントにモテないからな～。人生唯一の彼女が大学時代の学部一のブーちゃんだったし」
クックック、堪えきれずに番野は体を揺らせながら笑う。そんなんなら、いっそのこと大笑いしてくれた方が気持ちいい。
「しかも、そのブーちゃんに全部捧げちまった末にフラれちまった

わけだし」
「ちょっと！」
ごめんごめん、その言葉の代わりに番野は手を軽く上げる。
「でもよ、お前も顔は悪くないわけじゃん。普通なんだからさ、後はダメダメなところさえ直ればいいんだよ」
「それが直ってたら、とっくに直してるよ」
３０年もこの凡と付き合ってるんだ、そう簡単に直らないのは分かる。
「まぁ、気合いだ、気合い。お前に足らないのは、積極性と自信なんだから」
そうは言われても、こんな人間じゃあ自信もなくなるのは察してほしい。ローラースケートで流れるように道を進んできた番野と、三輪車で必死に道を進んできた苅部とでは結果は大きく違う。

焼き鳥屋から2分のところにある自宅マンションに帰ると、妹の康恵の姿があった。
両親は地方にいる祖父母と一緒に住んでるので、ここには2人で住んでいる。元はここから5分ほどの一回り大きなマンションに両親と4人で暮らしてたのだが、祖父母の体調が年々悪くなって、苅部が大学進学のときから母親が定期的に田舎に帰るようになった。
その2年後に康恵も大学に進学し、同じ頃に父親が山形に転勤が決まったので、今のマンションに2人で引っ越し、両親は祖父母を呼んで4人で山形に暮らすことになった。その

後は2人とも無難に就職し、康恵はなんてことないＯＬになる。
「お兄ちゃん、おかえり」
「あぁ、ただいま」
康恵はリビングで「巨人×ヤクルト」を熱心に見ている、ちなみに彼女は巨人ファンだ。
好きな選手は阿部慎之介、ホームランの打ち方が見てて気持ちいいらしい。幼少の頃から
父親の見ていたプロ野球に男の自分より影響されてしまった末がこの形だ。だからといって、徒に結んだ髪にＴシャツにジャージという寝巻き姿の雑なところまで似せることないだろうに。
「夕食、私も外で食べてきたから何も用意してないよ。番ちゃんのとこで食べてきたんでしょ？」
「うん」
康恵の言葉は送るだけで、意識は完全にテレビの画面に向いていた。一死満塁のピンチで代打が送られる見どころのシーンになっており、兄ですらそっちのけだ。
苅部は自分の部屋に入り、目的もなくベッドに寝そべる。
しばらくすると、
「よっしゃあ！」
と、強い声がリビングからここまで響く。おそらく、巨人がピンチを脱したのだろう。

第2話

異変に気づいたのは、朝目覚めて洗面所の鏡に映る自分を見たときだった。
なんだ、これは・・・・・。
自分の頭の上に銅の蛍光球がふわふわ浮かんでいる、漫画なんかで死者の頭の上に浮かんでる輪っかのように。
錯覚かと思い、目をパチクリさせるが消えない。手で振り払っても、頭を振ってみても一向に緑はそこからなくならない。
まだ夢を見てるのか、そう思いこみたかったが違った。明らかに現実にいる、なのに頭の上には緑の蛍光球がある。
そうだ、康恵に訊こう。そうリビングに行くと、我が目を疑った。康恵の頭の上には、白の蛍光球がふわふわ浮かんでいるのだ。
「おはよう、お兄ちゃん」
返事はしなかった、そんな余裕なんかない。
「お兄ちゃん、どうしたの？」
目を見開いて自分を見る苅部に、妹は眉間に皺をよせて言う。目の前の康恵は自分を見て何も言わない、何も見えていないのか。
「なぁ、俺の頭の上に何かついてない？」
そう、訊いてみる。
「何もないけど」
あっさり返される。

「そう・・・・・・」
「変なの」
そう言い、康恵は朝食の準備に戻る。白の蛍光球を浮かせながら、キッチンで魚を焼いている。
彼女にはこの蛍光球が見えてない、自分だけにしか見えないものなのだろうか。
一体これは何なんだ、疑おうとも答えは全く見えてこない。

黄、青、緑、紫、白、多色な蛍光球に苅部は動揺を隠せない。
会社に行くために外に出ると、視界に入る全ての人間の頭の上に蛍光球が浮かんでいる。
満員電車に乗っても、スーツを着た人ごみの上部には数かぎりない蛍光球だ。それぞれがいろいろな色味を発していて、同じ色でも濃度に差が表れている。
しかも不思議でならないのは、自分以外の人間はその蛍光球の存在に気づいている様子すらうかがえない。
まさか、これは自分の瞳にしか映っていないのか。なら自分が明らかな少数派で、この瞳にこそ不具合が生じているのではと思えた。
「おはようございます」
おはようございます、同僚は彼を見やってから目線を合わすことなく挨拶を返す。同僚からの挨拶に二言目はない、ただ今にかぎってはそんなことはどうでもいい。
会社を見渡しても、同僚の全員の頭の上に蛍光球が浮かんでいる。その中では黒と緑が1番多い色だろうか、紫や青や白もところどころに見やれる。
どうなってんだ、自分の目はどうにかなってしまったのか。

「おい、おいっ！」
「あっ、はい」
思考を続かせていると、先輩から強い声が飛ぶ。
「なにボッとしてんだよ、上の空か？」
「いえっ、すいません」
「これ、この前の出張のとかのな」
そう、雑に苅部のデスクに領収書を投げる。
「はい、分かりました」
自分のデスクに帰っていく先輩の頭の上には黒の蛍光球があった。
なんとなく察しては
いたが、この色の違いにはなにか意味があるのだろうかと考える。
だが、もちろん解答を
出そうとも答えなど分かる由もない。
「苅部さん」
はいっ、声を掛けられて我に返る。馬瀬がそこには立っていた、
少しの緊張が生じる。
「昨日渡したやつ、大丈夫ですか？」
あぁ、と馬瀬の言葉を理解する。
「はい、これでどうぞ」と用意しておいた金額を渡すと、
「ありがとうございます」と馬瀬は口角を上げて受け取る。
戻っていく馬瀬の後ろ姿に息をつく、彼女の頭の上には黄の蛍光
球があった。

仕事帰り、苅部は焼き鳥屋「どうよ」に寄る。
「どうした、昨日の今日で」
週に1回2回しか訪れないのに、2日連続で現れた親友に番野は
訊く。どうせ仕事の悩
みだろう、と思いながら。
「いや、なんか今日おかしいみたいで」

「お前はいっつもおかしいじゃねぇかよ」
そう笑う番野に、そういうことじゃなくてという目を向ける。
「なんだよ、言ってみろよ」
茶化さないから、と番野は姿勢を正す。
苅部は息をつき、
「実はさ・・・・・・」
と、朝から起こっている現象を話した。
最中の番野の様子といえば、話を疑ってるとしか思えないように耳にしていく。
「どうかな？」
おそるおそる訊いてみる。
「いやぁ、そりゃ無理な話だろ」
信じろっていうのが、と番野は言う。苅部がこんな冗談を言うやつじゃないのは分かってるが、信用するというには無理がある。
「でも本当なんだ、信じてよ」
「でもなぁ」
と、番野は首をかしげる。まぁ仕方ない、苅部だって全部を受け入れてくれというのは都合がいいのだろうと思っていたし。
「じゃあさ、俺の頭の上には何色のがあんの？」
一応気にはなったので、番野は訊く。
苅部は視線を上にあげ、
「金色」
と、教えた。
「金色って、そいつは結構いいんじゃないの？」
「いいって、良し悪しかどうかなのかも分からないし」
「何なんだろうな、金色って」
「さぁ、初めて見たし」
結局、番野も半信半疑といった反応でしかなかった。

翌朝、息を呑んでから鏡の前に立つ。
その翌日、そのまた翌日も、自分の頭の上には緑の蛍光球が浮かんでいた。１日限りの
現象だと自分に言い聞かせたかったが、そうはなってくれなかった。この蛍光球は限定的
なものじゃない、そしてこれは自分だけに備わったものなのだと悟る。同時に、これは一
体どんな能力で、どんな意味を為すのかという疑問も置かれてしまう。
一体なんなんだよ、そう頭を悩ませる。
「おいっ！」
先輩からの言葉に、苅部はハッとする。
「最近いつにも増してボッとしてるな、集中しろよ」
「はい、すいません」
急に備わった能力の代償は、仕事にまで差し支えてしまっていた。
「ちゃんとやることやってけよ、お前が遅いだけなんだから」
「はい」
そう先輩は帰っていく、気づけば時計の針は２０時になっていた。残業で残っているの
も苅部だけになっていた、そこには空調の音が空しく響いている。
急に自分に起こった現象に仕事も思うように手につかず、ただでさえ遅れがちなペース
はさらに遅れをみせていた。
それでも周りに人がいなくなれば、蛍光球が瞳にちらつくこともなくペースを戻せた。
溜め息混じりに仕事をしていると、コツコツと耳慣れた音が聞こえてくる。
「あっ」

と、会社に入ってきた彼女は呟く。
馬瀬遥だった、瞬間的に彼女の頭の上にある蛍光球が白から銅に移るのが分かった。
「どうしたんですか？」
まさか彼女がここに来るなど思いもよらず、心情が定まらない。
「忘れ物しちゃって、取りに来たんです」
あぁ、そう小さく言うと2人の空隙に言いようのない間が生じる。それを埋めるように
「まだ残業ですか？」
と、馬瀬が言う。
「はい、なんというか・・・仕事が思うように進まなくて」
言葉に少しためらう、彼女のような出来る人間に言うには恥ずかしみのあるものだったから。
すると、馬瀬はフッと笑みを見せて
「分かります、なんだか変にいろいろ考えちゃうときってありますよね」
と言ってくれた。きっと、自分に合わせてくれた言葉なんだろうと苅部は感じた。
馬瀬が自分のデスクに忘れ物を取りに行くと、苅部は仕事に意識を戻す。
といっても、そこは暗闇に照らされた電気の中の静かな一室に変わりはない。この空間
において馬瀬が気にならないはずはないが、下手に気を向けると彼女に変に伝わってしまうかもしれない。
馬瀬の存在を心の中に置きつつ、仕事に向かっていると視界に何かが入ってきた。目を
向けると湯気のたったコーヒーがあった、その向こうには馬瀬の姿がある。

「どうぞ、少しは休憩した方がいいですよ」と言い、
「じゃあ、頑張ってくださいね」と帰っていった。
余りに嬉しい心遣いだった、彼女以外の同僚だったら絶対に彼に
こんなことしないだろ
う。自分みたいな人間にここまでしてくれるなんて、勘違いをした
くもなる。
ただそれはいけない、好感触を持ったところで報われるはずのな
いことだから。馬瀬は
ここにいたのが誰だろうと同じことをしていた、そう言い聞かせた。

「お兄ちゃん、遅かったね～」
「あぁ、ちょっと残業でね」
家に帰ると、リビングにいた康恵はファッション雑誌を眺めてい
た。彼女の頭の上には、
黄の蛍光球が浮かんでいる。
「なぁ、今日って巨人どうだった？」
「勝ったよぉ、二岡が3打点で猛打賞の活躍で」
「ふぅん、そうか」
そう聞くと、苅部は自分の部屋へと入っていく。
だんだんと興味が湧いてきてるのが事実だった、この自分の瞳に
しか映らない蛍光球に。
この現象がこれからも続いていくのなら、この能力について知って
おく必要がある。

第3話

翌日から、苅部は自分に備わった能力についての調査をはじめた。うまくすれば、この能力を自分に良く使うことが可能かもしれないと思って。

まず、最初に気にかかったのは蛍光球の色だ。黄、黒、青、緑、金、銅、紫、白、この色の違いは一体何を表すのか。そして、これ以外にも色はいくつも存在するかもしれない。

分かったことの1つとして、この色は1人につき1色だけではないということ。今日起きたとき、鏡を見ると金の蛍光球が自分の頭の上にあったのが証拠だ。これまでは緑だったものが、今日になって金に変わったのだ。康恵にしても、白だったり、黄だったり、日によって色は変わっている。

もう1つの分かったことは、その色がシーンによって変わるということ。昨日の残業のとき、自分を見た馬瀬の蛍光球は白から銅へ移った。あれは間違いなく、馬瀬の自分に対する心持ちによって変化したものだろう。自分の蛍光球が今日は金だったことも、それが当てはまるかもしれない。

昨日まではこの能力に大きく迷いが生じていた、しかし今日は違う。この能力に向き合おうとしている、その心持ちの変化が自分の色に表れたんじゃないだろうか。単純に考え

がつくのは、この蛍光球の色が当人の心持ちの色であるというところだ。

その日から、苅部は周囲の人間を観察するように目を見張らせていく。浮かぶ蛍光球の色、その人の普段の人間性、その人の当時の心持ちに重点を置いて。

社長は４５歳、独身だが人望の厚い頼りがいのある人間だ。彼の頭の上の蛍光球は、色を見分けにくいほど薄いのが特徴といえる。

秘書の馬瀬は２７歳、才色兼備と評して劣ることのない人間だ。彼女の頭の上の蛍光球は、金や茶や緑が多いのが特徴といえる。

営業部の部長は４３歳、視野が広く上に立つのに適している人間だ。彼の頭の上の蛍光球は、わりと薄めの緑が多いのが特徴といえる。

いつも苅部に強く当たってくる、営業部の先輩は３３歳。彼の頭の上の蛍光球は、黒や緑や茶や紫がコロコロ変わるのが特徴といえる。

苅部の仕事の遅さに苛立つことの多い、財務部の部長は３７歳。彼女の頭の上の蛍光球は、黒や緑や紫が多いのが特徴といえる。

そして、苅部自身の蛍光球は、茶や緑が多いのが特徴だった。

このように、調査を重ねていくことで自分の能力を判断しようと試みた。

「でっ、今日の俺の色はどうよ？」

帰り道、焼き鳥屋「どうよ」に立ち寄ると番野から訊かれる。

あの日以来、彼からは毎度蛍光球の色を訊かれる。彼自身、苅部の言っていることを信

じきったわけではないが、全くの嘘だとも思えないような不安定な解釈が続いている。そして半分信じている自分として、自分の色味が気になるのは当然の流れだった。

「金だね」

そう言うと、番野は納得のいかない表情をする。

「俺いっつも金じゃねぇか、どういうことだよ」

「分かんないよ、番ちゃんがいつも変わらないってことじゃない？」

「そんなことねぇって、俺は日々成長してんだからよ」

毎度変わらない自分の色も、番野が苅部の説を信じきれないうちの一つといえた。

「でもあれじゃねぇか、金ってことは「スター性がある」みたいなことなんじゃねぇの」

「違うんじゃない？　俺、今日金だったから」

出端を叩かれ、番野は息をつく。

「お前、そういうこと言うなよな」

「しょうがないじゃん、実際そうなんだから」

「余計に分かんなくなってきたよ、お前の言ってることが」

そんなこと言われても、自分自身いきなり芽を出した能力に戸惑っているんだから。

苅部は息をつく、焦らずに時間をかけていけばいいと自分に言い聞かせた。

「そういう子が好きなんですか？」

急に左から届いた声に、苅部は心臓がドクンと鳴った。そのリアクションに、左隣から

フフフッと静かな笑いが聞こえる。

「すいません、驚かせちゃって」

馬瀬遥だった、こんなところでこんな時間に会うとは思ってなか

ったので驚いた。
「あぁ、どうしたんですか？」
何を話せばいいか分からず、とりあえずの言葉を言う。
「どうしたって、本を見にですよ」
あぁそうか、と苅部は馬瀬からの当然の返答に返す。
「いつもは仕事終わりに来てるんですけど、今日は夜に社長が接待があるから今のうちに
と思って」
会社の昼休憩の時間、外に食事に出た際に余った時間で書店に寄ったときのことだった。
苅部にとってはばつの悪いタイミングだった、ちょうど週刊誌のグラビアのページをめくっていたところだったため。
馬瀬の方に向けていた顔を持っていた週刊誌に戻す、ずいぶんとグラマーな女性が水着姿で浜辺に横たわっている写真が開いていた。
困惑を覚える、自分はただなんとなくページを流していただけなのに馬瀬にはそれが自分の好みであるかのように映っていたことが。
「違いますよ、時間潰しにちょっと見てただけですから」
馬瀬の最初の言葉に対する返答、これはこれで言い訳になれてなかったが。
「そうですか、ならよかったです」
そう彼女が口角を上げると、苅部もごまかすようにフフッとはにかんだ。

その後、なんとなくの流れで2人で会社に戻ることになった。
その道中では同じように昼休憩中と思われるサラリーマンたちと幾度となくすれ違う。
なんだか誇らしく感じた、馬瀬のような才色兼備な女性と横に並

んでそこを歩くのは。
ただ素直に喜びきれなくもあった、さっきの場面では彼女に失態といえるところを見られていたから。
「苅部さん、普段は外で食べてるんですか？」
馬瀬からの言葉、少しの緊張が生じる。
「それが多いですね、コンビニのおにぎりやパンじゃ物足りなさがあるんで。たまに、妹が弁当を作ってくれたりもするんですけど」
「妹さん、いらっしゃるんですか？」
「はい、３つ下に」
「へぇ、じゃあ同い年だ」
「あぁ、そうなりますね」
「妹さんは何されてるんですか？」
「普通のＯＬです」
「そうなんだ」
「えぇ、同い年でも馬瀬さんとは全然違います」
「そんなことないです、私もＯＬやりたいなぁって思いますもん」
「そうなんですか？」
「社長の秘書やってると窮屈になることがあって、こういうランチの時間に３～４人で並んで楽しそうに話しながら歩いてるＯＬさんを見るといいなぁって思ったりします」
「へぇ、そうは見えませんけどね」
馬瀬は仕事もそつなくこなし、同年代の同性を対象とすれば一歩先をいくような存在に思える。
「そんな堅そうに見えます、私って？」
自分の心を見透かされたようで、苅部は言葉につまる。
「やっぱり、秘書なんてお堅い仕事なのかなぁ」

そう馬瀬は息をつく、目線は下を向いていた。
「でも凄いですよ、年下なのに毎日テキパキ仕事してて。俺なんか、怒られてばっかりですから」
「ですね、いっつも怒られてますもんね」
そう言うと、馬瀬に笑顔が戻る。
「たまに理不尽な気もするときありますし、俺そんなに悪いことしたのかなって」
「苅部さんはなんか言いやすいんですよ、弟気質っていうか。みんな上司から言われて溜まってるのを部下の苅部さんに吐き出す、みたいな」
「損な役回りですよね、それに弟気質って実生活では兄なのに」
苅部が笑みを浮かべると、馬瀬もそれに続く。
「いいんですよ、苅部さんは苅部さんらしくいれば」
なんだか、馬瀬に慰めてもらってるような展開になっていた。それでも、彼女とこうして長い時間話していられるのは幸せといえたが。
別れ際、馬瀬の頭の上の蛍光球が黄であることを確認できた。
そして、別れた後に彼女との会話の中にあった不明な点に気づく。

「妹さん、いらっしゃるんですか？」
「はい、３つ下に」
「へぇ、じゃあ同い年だ」
「あぁ、そうなりますね」

そのときは聞き流していたが、よくよく考えると違和感があった。苅部が康恵と３つ違いであると聞いて、馬瀬はすぐに同い年だと言った。
つまり、彼女は苅部が３０歳であることを知っていたといえる。
どうして、自分のよう

な目立たない存在の人間の年齢をはっきりと覚えていたのだろうか。社員のデータを扱う
機会も多いし、なんとなく覚えていたと言われればそれまでだが。

その夜、馬瀬は社長の接待の付き添いで和料亭を訪れていた。相手はこの周辺の数県に
ある１０店舗のインテリアショップを経営するオーナー兼社長。年は５０歳手前あたりだ
ろうか、目の先が上がっていて仕事の出来そうな女性といった印象だ。女社長の横には、
３０歳代半ばの女性秘書がいる。

その４人でのビジネスありきの会食は、緊張感が保たれる。我社の社長は自社のとって
おきの製品を店舗に置いてもらおうと巧みにプレゼンし、相手方の社長はその製品が自社
にふさわしいものかを慎重に見定め、秘書２人はいつ話を振られても対応できるように耳
をピンと立てていないとならない。

ただでさえ、そこの席でやり取りされる会話は難度の高いものなのだから。もしも秘書
のせいで、まとまる話がこじれるようなことがあれば大失態だ。

「というわけですが、いかがでしょうか？」

社長がプレゼンを終えると、相手方の女社長はしばらく考える。顎に手の先を添えなが
ら、目線を変えて

「あなたはどう思う？」

と、馬瀬に意見を求める。

それに対し、表情を固めることもなく、

「このタイプのものは今欧州で流行してますし、色合いもシンプル

でファニーな印象を抱
かせます。家に置いてもスッと馴染めますし、それでいてアクセントもあります。スタン
ダードの枠を超えることなく、作り手の遊び心も入った非常に面白
い作品だと思います」
馬瀬は心の中でフッと息をつく。
事前に用意してあった言葉だ、こうやって意見を聞かれることも
多いから。オシャレは
足元から、家を見るには玄関を、というようなものだ。秘書がなっ
てない会社に、相手は
良い印象を持つことはない。自分が仕事を決定させる関門の一つ、
それを彼女も自覚して
いた。

「じゃあ、今日はご苦労さん」
「はい、お疲れ様でした」
接待の夕食後、社長と別れると馬瀬は大きな溜め息をついた。緊
張から解きほぐされる
瞬間だ、身体に張りついている膜がはがれるような。駅前の人が流
れていく中でも、許さ
れるなら思いきり手足を大の字に伸ばしたい。
社長のサポートという仕事は想像以上に疲れる、毎日が試験日の
ような感じだ。自分の
レベル以上の場所に立たされる日々は、やりがいがあるというより
も難しい。重圧に押し
潰されそうになることもある、それでも周囲が自分を待ってくれる
わけじゃない。必死に
なって目前の事をこなしていく、表面には出さないが心内は常にい
っぱいいっぱいだ。明
るみに出している馬瀬の気品のある佇まいは作られたもの、本当は

もっと嫌な部分だって
いくらでもある。
「ただいま、ム～チャ」
一人暮らしの空しい家に帰ると、愛犬に迎えられる。ム～チャと
たわむれてる時間が癒
しであり、唯一の支えだった。
休日に友人たちと会って、それぞれの仕事の愚痴を言い合うのも
ストレス解消にはなる。
ただ、もっと心の奥底から自分を救い出してくれるような空間が欲
しい。恋人でもいれば
違うんじゃない、そう友人から助言をもらったが簡単にもいかない。
社内の女子から合コ
ンに誘われることもあるけれど、性格上どうもあの空気は合わない。
見ず知らずの男女が
集まって、印象を良くするために高く取り繕った自分を発表する場
のように思えて。そん
なのじゃなく、もっと自然な自分を好きになってもらいたいし、自
分も相手の自然なとこ
ろを好きになりたい。
仕事場でも秘書という立場から、出会いはないわけじゃない。で
も、そこで面と向かう
男性たちは気を張った仕事型人間ばかりだ。バリバリと働くキャリ
アは自分には違う、家
まで仕事型人間と一緒にいたら休まらない。恋人には癒しを求めた
い、普段の緊張感に覆
われた自分を解してくれるような。

苅部は自宅に帰ると、風呂上りに枝豆をつまみにビールを飲む。
一日の中の至福といえ

る時間だ、仕事でのあれこれを解消してくれるように。こんなにも庶民派なアイテムなの
に、なぜこれだけ心の隙間を埋めてくれるのだろうか。
康恵がつけていたテレビの画面では、「巨人×広島」の試合が流れている。小さい頃に見
ていた父親の姿そのものだ、良くも悪くも2人は親の血を継いでるのだなと思った。
彼女は巨人の有利な展開には手を合わせて喜び、不利な展開には舌打ちをして悔しがる。
今日は前者だった、良顔でリビングの中央に置かれたみかんを夕食までのつなぎとして口
に運ぶ。夕食はいつも巨人の試合が終わらないと作らないので、この2人の光景は通例の
ものだった。
ナイターの野球中継から延長がなくなったのは彼には嬉しいことだった、試合展開にか
かわらず21時前には夕食の準備が始まるから。その代わり、当然のように彼女は終盤の
ここという場面を見られないことに腹をたてていたが。
「よぉし、今日はスカッとしたな〜」
試合は中継時間内に終わった、巨人はお得意の一発攻勢で勝った。
気分良好な康恵はキッチンに向かっていく、彼女の頭の上の蛍光球は黄を点していた。
その色に苅部はなにかを感じた、それはさほど悩むこともなく正解が出てくる。馬瀬の
ことが浮かぶ、今日の昼休憩に会ったときの彼女の蛍光球も黄だった。
そのときの馬瀬と今の康恵は、同じ感情ということなのだろうか。
キッチンで料理に取
り掛かる康恵に目を向ける、鼻歌まじりに上機嫌な様子だ。この蛍

光球が感情を表すもの
ならば、あのとき馬瀬も上機嫌だったのだろうか。週刊誌のグラビアページを眺めていた
冴えない平社員と話していたのに。
疑問が進む、本当にこの蛍光球はそういう意味合いのものなのか。

第４話

会社での朝礼の時間、社長から新しい契約が結ばれたことが発表された。以前、馬瀬が
苅部と昼休憩に顔を合わせたときに言っていた接待の相手先とのものだ。
それに、社員たちは喜びを見せて拍手する。社員たちが製品と取引先を見つけ、重役が
契約まで結びつける。会社としての形はうまくいっている、小規模であることが結束力を
強くさせてる部分もあるのだろう。
「おい、俺の出張費できてるか？」
とはいっても、苅部はその中で弟気質をいかんなく発揮させる日々が続く。
「はい、これでお願いします」
先輩たちからの態度は強いものが多い、何もしてないのに怒られ口調をされることも何
度となくある。彼は生粋の子分肌だった、損な役回りであることは昔から充分に悟ってい
る。出来ることなら変わりたい、だがそんな勇気もない。
苅部はふと周囲を見渡す、その瞳に映る社員たちの頭上の蛍光球に目は留まる。どうい
うことかはさっぱりだが、この能力は完全に自分に入りきってしまったらしい。身に付い
た当初は数日で消えるものだろうと思っていたが、そうではなかった。これは自分だけに
備わった能力、きっと神様が堕落した自分のような人間にチャンス

をくれたのだろう。
無論、天上界だとか黄泉の国だとかを信じているわけでもない。ただこうでも設定を置かないかぎり、この不可思議な現象を説明する術はない。
こうなった以上、せっかくの能力を有効活用しない手はない。使用法を自分のものにして、こんなダメな自分を卒業しよう。そう言い聞かせると、再び目先の仕事へ意識を戻した。

少しだけだが、この能力について分かったこともある。「分かった」というより、自分の中で仮説を立てたということではあるが。
よく目にする、苅部に対して強い態度を取る先輩たち。彼らに共通する蛍光球は緑と黒が多い、またかと思うほど。彼らが自分と接するときに抱く感情について考えてみる。おそらく、苛立ち、見下す、嫌う、といったものではないだろうか。苅部自身、起床したときに鏡に映る自分に緑が点っていることはある。朝の自分について考えてみる、今日も会社での億劫な時間があると息をつくことが多い。だとすれば緑は嫌悪感というものに近いのでは、そして黒も近似した意味合いであるのだろう。朝の出勤時間に見かけるサラリーマンの波に緑が多いのも、これで頷ける。
あと、よく見る色が黄だった。康恵や馬瀬しかり、昼休憩やアフター5のときに目にすることが多い。おそらく、喜び、楽しみ、といったものではないだろうか。先程の朝礼の

とき、拍手をして喜びの顔をしている社員たちの蛍光球が黄であったことも納得できる。
この３つの色については、なんとなく掴めてきた気がする。
ただ一つ、納得のいってないところもあったが。それは馬瀬だった、彼女が自分と接するときに黄であることが多いのだ。３０人余いる社員の中でも、自分に対して黄が点るのは彼女ぐらいといえる。なぜ彼女は黄なのか、もしかして黄はまた別の意味合いなのだろうか。それとも、自分と接する前に彼女になにか良いことが起こってるのだろうか。昼食が美味しかったとか、仕事先で褒められたとか。それにしても、毎回それが起こってるとも言いがたいが。
まだまだ謎が多いのも事実だ、もっとこの能力について調べないと。

「苅部さん、どうぞ」
「あっ、すいません」
そう勧められると、苅部のグラスに馬瀬が白ワインを注いでいく。
その日の夜、新しい契約のお祝いの飲み会が開かれた。会場は会社からも歩いていける距離にあるスタンディングのバー、会社の祝会が行われるときにはよく使用している場所だった。昨日の契約成立での今日のだったが、馬瀬がお願いすると貸し切りにすることができた。常連ということで多少の融通は利くらしい。
「乾杯していいですか？」
「あっ、はい」

そう言うと、2人のグラスがカンとガラス製の音をたてる。
「契約、おめでとうございます」
「いや、私は何もしてませんから」
苅部の言葉に、馬瀬は恐縮をする。
「でも尊敬しますよ、秘書は大変な仕事でしょうし」
「尊敬だなんてやめてください、大したことしてませんから」
「そんなことないですよ、自分は絶対できないと思うし」
その言葉に、馬瀬はかぶりを振る。まだ半人前の自分があまり上に見られたくない、それが本心だったから。
「白ワイン、飲まれること多いですよね？」
これ以上は続けたくなかったため、話を変える。
「あぁ、あんまり強いのは飲めなくて」
「私もです、やっぱり飲みやすいものがいいなって」
そう言いながら、馬瀬は右手に持っていた白ワインの入ったグラスを見せる。
「僕の場合、ただ冒険心がないだけなんですけどね。いつもはビールを飲んでて、普段飲んでるものに落ち着いてしまってるっていう」
「いいじゃないですか、飲みたいものを飲むべきですから」
お互いにコクッと白ワインを含ませる。
「馬瀬さんは普段からこういうオシャレなところに来るんですか？」
「そうですね、こういう明るめなところが多いかもしれません」
「どうしてですか？」
と、馬瀬が訊く。
「なんか、似合うなと思って」
苅部の方を見やり、馬瀬は溜め息のような言葉をもらす。
「それは単なるイメージですよ」
馬瀬が目線が向いてると、やがて苅部の目線も彼女に向いた。
「確かにこういうところも好きですけど、それだけじゃありません

から。そういう決めつ
けで言われるのって・・・なんか嫌です」
すいませんと言うと、馬瀬はそこから離れていった。
同時に、黄を保っていた彼女の蛍光球が緑に移ったのも確認した。

「間違いねぇな、そいつはお前に惚れてるよ」
帰り道、焼き鳥屋「どうよ」に立ち寄ると番野から言われる。
「えぇっ」
苅部は驚きの声を出す、当然のことだろう。
「あんまでかい声出すなって」
そう注意され、ごめんと答える。
「今、何て言ったの？」
「聞こえてんだろうが、驚いてんだからよ」
もちろん聞こえてる、でも彼の言葉は容易に理解することができない。
「なんで、なんでそうなるの？」
「俺にも分かんねぇよ、そんな綺麗どころがお前なんかになんて。
でもよ、俺の経験上、
お前の話を聞いてると答えはそうなるんだよ」
そんなこと言われても、苅部の頭は混乱するばかりだ。
一度自分の中で整理してみる、少ししてかぶりを振る。
「やっぱり無いよ、そんなこと」
「だろうな」
あっさり番野は言う。
「だろうなって、一体どっちなのさ？」
「だから俺の経験上では彼女は惚れてる、でもお前の姿を見てると
そうは思えない」
そりゃそうだ、ここにいるのはしがなく冴えないサラリーマンな
んだから。

「単なるイメージで決めつけられたくない、ってんだろ。そりゃあな、人間には表向きと
裏向きの顔があるわけだし。お前が見てるのは彼女の表向きだ、お前はそこから推測した
意見を言った。それを彼女は嫌だと言った、表だけでの発言は嫌だってことさ。要は、裏
も見て言ってくださいってことだ。裏向きの自分も見てください、飾らない自分を見て欲
しいっていうな」
　番野の言葉を自分なりに考えてみる、やはり苅部はかぶりを振る。
「どうも信じきれないな、なんか」
「それはお前がモテないからだよ、物事を否定的に捉えるようになってんだって。彼女の
頭の上はいつも黄色なんだろ？　それが嬉しいって感情だったら、少なくともお前に対し
て嫌悪感はないよ」
「それはそうかもしんないけど」
　だからと言って、馬瀬が好意を持ってるとは信じがたい。
「とりあえず、その彼女を誘ってみろ」
「はっ、どういうこと？」
　苅部は驚きを顔にままに出している。
「どういうことって、そういうことだろうが。みすみすチャンスを逃すのか、バカなやつ
だな。せっかくのラッキーボールなんだから、思いきりかっとばせ。こんなこと、滅多に
ありゃしないんだから」
　そうは言っても、あまりに勇気を伴う行為だ。
「それに、お前の言ってる能力を試すチャンスでもあるだろ」
「どういうこと？」
「それでＯＫもらえたら、黄色は嬉しいってことに決まりだろ？」

ハッとする、確かにそれはそうだ。
「いいから、玉砕覚悟でいってみろ。傷つけちまったお詫びみたいに言えば、やらしくは感じ取られないだろうし」
なんだか少し自信のようなものが湧いた。
そうだ、この能力で自分の堕落した人生を変えるんだ。

翌日、苅部は仕事終わりの時間帯を見計らっていた。苅部は通常のように遅れた分の仕事を残業でこなし、　馬瀬も取引先のデータをまとめる仕事を残業でこなしている。
先に残業を終えたのは馬瀬だった、お疲れ様ですと帰っていく。苅部も慌てるように5分後に残業を終え、そそくさと会社を後にした。今から追っていけば最寄り駅までには追いつけるだろうか、彼のその考えはいらなかった。
エレベーターで1階まで下りると、フロアに彼女の姿があったのだ。
「お疲れ様です」
そう彼女が軽く頭を下げると、苅部も同じようにする。
「どうしたんですか？」
何気なく訊ねる、自分の描いてた展開と違う状況に彼は少し気が焦っていた。
「あの・・・昨日のことなんですけど」
昨日のこと、思い出そうとするが焦りがあるからか、うまくいかない。
「私、生意気なこと言いましたよね、すいません」
馬瀬は大きく頭を下げる。
それに苅部は何かを言いたかったが、いい言葉が見つからなかっ

た。
「あれから申し訳なく思って、失礼なことしちゃったなって」
「いえ、そんな・・・・・・」
動揺もあって無表情で返答をすると、
「じゃあ・・・すいませんでした」
と、馬瀬はまた一礼して帰ろうとする。
その姿を目にしながら、どうする、どうする、と心内に問いかける。
「あのっ！」
そう言うと、後ろ姿の彼女が振り向く。
言え、言うんだ、と心内を奮わせる。
「この後、時間とかありませんか？」
「えっ？」
言え、言うんだ、もう一度心内を奮わせる。
「よかったら、食事でもしませんか？」
苅部の言葉に、馬瀬は気持ち目を丸くさせる。
少しの間が生じる、それがなんともその場の2人に緊張を張り巡らせる。時間にすれば
わずかだが、心持ちを時間に例えるなら数分ぐらいに思えた。
「・・・・・・はい」
彼女からの返事だった、それになんともいえぬ感情が湧いてきた。

第5話

この1週間、苅部は仕事中も馬瀬の方へ視線がいくようになっていた。番野からあんな
ことを言われてから、変に彼女のことが気になってしまい。
ただ彼女が自分に気があるなどと考えるのは思い上がった話であって、自分自身にもそ
んなことはありえないと言い聞かせる日々が続いた。
1週間前に馬瀬を食事に誘ったときも大した展開にはならなかった。以前の飲み会のと
きのような彼女を傷つける言葉は避け、いつものような会話を続けるぐらいの。
それでも、彼女の頭の上の蛍光球は黄を照らし続けていた。これに関しては、もう自分
の中で否定をすることをやめることにした。黄は嬉しかったり喜んだりするときに点る色、
そう定める。焼き鳥屋で仕事をしながら常連客とワイワイ談笑しているときの番野、スカ
ッとする勝ち方をしたときの巨人の試合を見ているときの康恵、そして普段目にするいか
にも楽しそうな人たちの頭の上に黄が浮かんでいるから。
なぜ馬瀬が自分といるときに黄になるのかは分かりきれない、だが彼女は嬉しいのだろ
う。自意識過剰になる気はないが、それが現実なのだとした。
他にも、いくつか意味を解読できたものがある。
緑の蛍光球、これはおそらく「嫌」ということだろう。よく寝起きで鏡に映す自分に点

るのは、また会社に行ってピーピー言われるのかという気持ち。自分に接している先輩たちに点るのは、仕事のできない後輩に感じる苛立ち。そして朝の通勤時にサラリーマンたちに多いのも、自分と同じことがいえるのだろう。

黒の蛍光球、これはおそらく「怒り」ということだろう。営業部の人たちが外出した営業先から結果を残せずに帰ってきたとき、平社員たちが部長クラスの人から説教をああだこうだと受けたとき、そして飲み屋で見かける帰宅途中のサラリーマンたちが愚痴ってるときに頭の上に浮かんでいるから。

そんなふうに、苅部は少しずつ己の能力について把握しだした。

「そういうわけで、どうぞご検討の方をよろしくお願いします」

社長室から出てきた男がそう言う。淡いスーツを着た短髪の男に、他社からウチへ営業で来たのだろうと印象を抱く。

ウチのような小さな会社に営業の人間が訪れるのは珍しい。通常ならば、こちらから出向く機会が自然と大体を占めることになるから。こちらから商品を宣伝していき、相手先にそれを認めてもらう展開が。

その点で、ウチの会社における営業部の重要度は高いといえる。実力でそう見極められたといえど、その中に自分が入らなくてよかったなと苅部は思う。見くびられたといえど、そこに配属になっていたら結果を残せずクビも覚悟しなければならなかったことだろう。財務部でよかった、つくづく思う自分自身を嫌に思ったりもした。

その日の仕事終わり、苅部が毎度のように残業をしていると違和感が生じた。社長室へ、各部署の部長と馬瀬が呼ばれていたのだ。さらに、その後にその全員で会社を後にしていく。今日のあの淡いスーツの男とのことではないか、なんとなくそう察することができた。目にしたことのない展開だったため、苅部も心内に嫌な感情が生まれていた。

翌日、会社での仕事中は誰も昨日の残業中に起こった展開を引きずる様子はなかった。社長も部長たちも馬瀬も、自分の仕事へと通常のとおりに打ち込んでいる。

なんだ、昨日のことは大したことではないのか。そう苅部も思った、わだかまりのあった心内をスッと和らげることができた。

しかし、それは違っていたようだ。

その日の仕事終わり、苅部の残業も先が見えてきた頃合になる。フウッ、馬瀬が頬杖をつきながら鼻息を大きくついた。たまたま彼女の方へ目線がいったときだったが、その姿は強く苅部にインプットされる。残業中といえど、彼女のそこまで崩れた姿はあまり目にした機会がないから。背筋のスッと伸びた隙の見当たらない女性という普段の印象とは離れ、家でなにやら物思いに耽るように目の前のパソコンの画面を眺めている。正直ここに自分と馬瀬の2人しかいない状況であるなら、「どうかしました？」と声を掛けるところだ。

ただ、この時間にはそういう環境になることは少なく、今も2人を含めて4人の社員が会社に残っていた。
そうとは分かりつつも、苅部は馬瀬が気にかかった。何かいい方法はないだろうかと考えると、そうだ、と思いつく。
苅部は目の前にあるキーボードに指を走らせていく。

「どうかしました？　さっきから、なんだか考え事をしているようだったので」

社内メール、それを利用して彼女に言葉を投げ掛けることにした。私用で使った試しがなかったので、なにか悪いことをしてるような気になりながら。
送信ボタンを押すと、遠くで一点を見ていた馬瀬の表情が変わるのを見やれた。小さく動く彼女の手元を見てると、やがて彼女の目元がこちらに向く。なんとも言えない表情で向いている自分と彼女の目線が合う。
やがて彼女の目線は外れ、その手元が動いていく。10秒ほどで、苅部のパソコンに受信メールを知らせるアイコンが動いた。メールは当然に馬瀬からのもので、それを開く。

「分かりました？」

馬瀬の方を見ると、彼女はクッと口角を上げた。
苅部は再びキーボードを打つ、その文章を馬瀬に送信する。

「少し考えあぐねてる様子だったので。仕事のことですか？」

メールを見た馬瀬は苅部と目線を合わせ、また返信を打っていく。彼女の頭の上の蛍光
球が、さっきまでの白から黄に変わっていた。

「はい、ちょっと難しい展開になってまして」

難しい展開、昨日のスーツの男に関することだろうか。そうだとしたら、やはり只事で
はないのかもしれない。
苅部は返信メールを打つ、しかし途中で手が止まる。「よかったら、相談に乗りましょう
か？」という文章を打ったが、送信ボタンを押せなかった。相談に乗りたい気持ちはやま
やまだが、自分にそれほどの技量がないことも分かってる。社長や部長たちが集まるほど
で、馬瀬があれほど頭を悩ませるほどの件だ。自分なんかが聞いて、あれこれ的確なアド
バイスを送れるとは到底思えなかった。下手に手を貸そうとして、逆に自分の非力さを露
わにしてしまう。
そう思考しているうちに、彼女の方からメールが送られてきた。

「もしよかったらですけど、相談に乗ってもらえませんか？」

馬瀬の方を見ると、彼女は目を細めてこちらを見ていた。その瞳の中に「お願いします」
という言葉があるようだった、それが苅部の心に響く。自分なんかに頼ってきてくれる彼
女の思いに応えないという選択はできなかった。

「いいですよ、自分なんかでよければ」

返信するとともに、身体に責任感が宿る。それを送ったからには、ある程度の覚悟が必要だという。

メールを受け取った馬瀬は、申し訳なさそうにこちらに少し頭を下げる。

そこからはメールをやり取りしながら残業を終わらせて、時間差で会社を後にした。

その後、２人が訪れたのはなんてことないファミレスだった。よく大通り沿いに目にする、外には誘い文句のかかれた多数の幟が風になびき、入口のすぐ側に子供用のおもちゃが置いてある、２０～３０のテーブル席が並ぶ、いたって普通の店。馬瀬の方から、長時間いられる、うるさすぎず静かすぎない空間ということで決まった。

店内に入ると、インパクトの薄い制服を着た店員に席まで誘導される。店内には時間帯から、ほとんどの席に客が埋まっていた。こういうところなら家族連れが多いのだろうが、場所柄から仕事帰りの人間が目立つ。それぞれがそれぞれのテーブル内の世界に入りこみ、大きな一つの空間であるはずなのに中味は２０～３０に分けられた小世界になっている。

その中の１つの小世界である２人は、とりあえずコーヒーをオーダーする。ごはんを食べてしまう前に、まずは馬瀬の話をすることにした。

「昨日、ウチの会社に他社の営業の方が来られたのって分かります？」
「はい、ウチに営業が来るのはあまりないですから」
「実は、あの人のことで難しい展開になってまして」
やはり、あのスーツの男の話なのか。
「昨日、社長と部長たちと一緒に会社を出てってましたよね。あの後、どこかに行ってたんですか？」
あっ、それを苅部に見られていたのかと馬瀬の顔に出る。
「あれは、全員で夕食に行ったんです。もちろん、今回のことについての話し合いということで」
そう言うと、馬瀬は本題に入りはじめた。
「昨日来られた方なんですが、今月末に新しくファッションショップをオープンさせるショップの代表の方でして。デザインや服飾の専門学校を卒業した人たちがチームを組んで出店するらしいんですが、当日までの店舗に関する費用は自分たちでなんとかしたけれど当日からの経営に関する費用などが賄えてないそうで。融資をしてくれる会社を探して、ああやって周っていたみたいです」
「融資、ですか？」
想像していたものと大きくはずれた話だった。
「はい、その代わりにウチの会社で扱ってる商品を店内に置いてくれるそうです。店のＰＯＰのような感覚で、ウチのインテリアの宣伝代わりになればという」
確かに都合の悪い話ではない。
「それで、社長や部長たちは？」

「悪い話じゃないけれど、見送る方向がいいんじゃないかって。素人に毛の生えたぐらい
の奴らのショップに関わって、そんなにうまいことといくと思えないっていう」
まぁ、そうなるだろう。
「それはもう、向こうの人たちには言ってあるんですか？」
「いえ、明日にまた代表の方がウチに来るので、そのときに」
そうか、それでこの話は終わりということに。
まてよ、なら彼女はどうして決着のついた話を自分にまた掘り起こしているんだ。
「それで、相談というのは？」
そう言うと、馬瀬は彼女のバッグから黒のケースを取り出す。
それを苅部に差し出し、
「見てもらっていいですか？」
と言う。
苅部はその言葉の通りにケースの中身に目を通していく。そこにあったのは、色とりどりのポップな洋服の数々の写真だった。
「これは？」
「そのファッションショップに置かれる洋服です」
なるほど、こういうタイプのショップになるのか。
そこにある全ての写真を見ていくと、ポップなものからストレートなものまで幅広い種類があった。苅部にはおそらく縁がないんじゃないかと思われる、若者にウケそうな感じだ。
良い意味において、それらは素人っぽいと思えた。社会に出て、企業にもまれることで携わっていく規制にとらわれてない遊び心がそこにはあったから。
「どう思いますか？」

「いいと思います、あんまり洋服のことは詳しくないんですけど」
「本当ですか？」
そうですよね、そう馬瀬がうなずくように言う。
「すごくいいと思うんです、ウチのインテリアにも合いそうだし。きっといいショップになります、この人たちと一緒にできれば。私は是非やってみたいです、あくまで個人の意見なんですけど」
馬瀬にはその写真に写ったファッションたちが煌いたように見えた。社会の重責を担ってきた社長や部長たちには感じ取れなかったかもしれないが、まだそこに大きく身を注ぎこんでいない彼女には感じ取れた。
そうだった、自分も社会に出るときにはこんな煌きを携えていたんだ。それがいつのまにか、日々をやりくりする中で片隅の方へ置いてしまっていた。それを再び思い起こさせてくれた、こういうことが自分はやりたかったんだと。
馬瀬の感情を表に出した言葉に、苅部は特にといった言葉が出なかった。確かに悪くないとは思う、ただやる以上は会社としては利益を求める。社長の言葉の引用だが、素人以上プロ未満といえる人たちにそれをするのは難しいのだろう。会社を背負ってる社長や部長たちがＯＫを出さなかったことも汲み取れる。
「・・・・・・でも、私１人がなにを言ったところでどうにもならないんですよね」
そう言って、馬瀬は息をつく。
何か、何か今の彼女に効く良い言葉はないだろうか。インテリアの知識もそんなにない、

会社の経営の知識はもっとない、それでも眼前で元気のない彼女に何か言葉を。
「・・・・・・ごめんなさい、なんか白けちゃいましたね」
馬瀬はフッと微笑む、無理に作ったものであるのは容易に察しれた。
結局、苅部は何もしてやれなかった。つくづく自分が嫌になる、せっかく備わった能力
でさえ何も効果をもたらさない。人の今の感情を見れるようになっても、眼前の彼女を元
気にさせることもできない。
こんなんじゃダメだ、こんなんじゃ・・・・・・。
帰り道、夜空に包まれながらそう歩を進めた、変わりたいと心底に思えた。

翌日の朝だった、苅部はキッチンで朝食を作っている康恵を目にして驚く。青・白・金、
横に並んだ3つの蛍光球が頭の上に浮かんでいた。
思わず目をこすってみるが、眠りの余韻でかすんで見えたわけじゃなかった。慌てるよ
うに洗面所へ急ぎ、鏡に自分の姿を映す。青・銅・緑、苅部の頭の上にも3つの蛍光球が
同じように浮かんでいた。
一体なんなんだ、これは。
どう考えようにも、その答えがあっさりと分かるはずもなかった。

第6話

家から会社までの時間、苅部はパニックに陥りそうだった。右も左も、前も後ろも、周囲の人間の頭の上の蛍光球が3つずつに増えている。その色は全て同じ人もいれば、全てダブらない人もいる。

これはどういうことなんだろうか、そう考えようにも簡単にはいかない。1つでさえ理解に苦しんだのに、いきなり3つにもなられると対処に難する。恋人に妊娠したと聞かされる男は大抵は大きな衝撃を身に受けるだろうが、それが3つ子だと聞かされたら心内の対処に困るはずだ。そんなように、彼もまた眼前に起こる現実に頭を悩ませていた。

ただ、考えを進めていくうちに少し仮説をたてることもできた。ヒントは青、この色についても苅部は感情の意味合いを察することが出来ていた。青は悲しさ、巨人が負けた試合の後に康恵の頭の上に点ることが多いことから予想がついた。

そして、朝に苅部と康恵の左端の蛍光球がともに青だったという共通点。2人の悲しみについて思い浮かべる、それは昨日の夜に正解があった。苅部は馬瀬からの相談に何もしてやれなかったこと、康恵は巨人のボロ負けがそれにあたる。ならば、左端の蛍光球は昨日のその人の感情、もしくは近い過去の感情ということか。

中央の蛍光球については自信に近い予想がつく、おそらく現在のその人の感情を示したものだ。苅部の銅は彼にこの能力が備わったときに点っていた色だった、つまり銅は発見だとか驚きなどを意味する色ではないだろうか。康恵の白は大概の朝には彼女に点っている色だ、色からして無心を意味してるのではないだろうか。

左端が過去、中央が現在、じゃあ右端は・・・・・・。

自分のたてた仮説に、苅部はかぶりを大きく振った。まさか、そんなことがあるっていうのか。

未来を点す蛍光球、そんなものが現在に存在するというのか。

そんなたどたどしい思考の中、会社に到着すると1番に馬瀬の姿を探した。彼女はすでに出社しており、社長室の手前にある自分のデスクに向かっている。

緑・金・緑、彼女の頭の上にあった蛍光球はその3つだった。苅部の仮説を置くのなら、彼女は過去に嫌なことがあり、未来にも嫌なことがある。中央の金はまだ解明できてない色だった、番野によく点っている色であることは分かっていたが詳しくは分からない。

自分のデスクにつくと、しばらくもしないうちにパソコンの受信メールを知らせるアイコンが動いた。どうしようかと思っていたところで、彼女の方から動いてきてくれた。

「昨日はごちそうしてもらって、ありがとうございました。話も聞いてもらえて、少しスッキリしました」

なんだか、形式張った文章のように感じた。
苅部はキーボードを打ち、返信を馬瀬へ送る。

「ごちそうといっても、ファミレスですけどね。それに、相談に乗るはずなのに何一つ的確なこと言えずにすいませんでした」

文章を打ちながら、自虐の念に駆られる。自分の中にあるしこりを取り除くように、それを文章へ吐き出した。

「そんなふうに思わないでください、多分私も話を聞いてもらいたかっただけだから」

その文章に苅部はホッとする。彼女の気遣いによるものかもしれないが、彼はそれを良いように捉えることにした。
同時に疑問も生じる、苅部の仮説によるなら彼女には昨日嫌なことがあったはずだから。
彼の頭内を見透かしていたように次の馬瀬からのメールが届く、タイトルには「でも」と書かれていた。

「でも・・・優しい言葉を掛けてもらいたかったのかもしれない。考えあぐねてる自分がいて、その姿を慰めてもらいたい自分がいて。そんな自分を嫌に思いました、なんか自分の弱みを逆に利用してるようで」

社内メールはそこで交信が途絶えたが、苅部の疑問は解決された。馬瀬は苅部に嫌悪感を抱いたのではなく、自分自身を嫌に感じたのだった。
ただ自分が何もしてやれなかったことに変わりはない、彼女に何かしてあげたい。

その日の午後、一昨日の淡いスーツを着た短髪の男が会社を訪れた。
社長室に入っていった数分後、出てきた彼の姿はどことなく小さく感じた。おそらくは社長から融資はできない旨が伝えられ、それに肩をすぼめているのだろう。会社を後にしていく彼の姿を馬瀬は目で追っていた、彼女の会釈はスーツの男の目に入っていなかったようだ。
茶・青・黄、スーツの男の蛍光球に苅部は引っ掛かる。過去の感情、茶はこの会社内でも何度と目にしている色だった。この色を点す人たちの共通点は、日々の気忙しさ、焦りといった感情だ。スーツの男に置き換える、融資の額の集まらない状況に生じたものだろう。
現在の感情、青は先述のように悲しさの色だった。スーツの男に置き換える、抱いて来た一抹の希望を消された現状に生じたものだろう。
そして未来の感情、黄はこれまでに幾度と目にしている喜びの色だった。スーツの男に置き換える、彼には未来に喜びが待っているということなのか。ウチの会社以外から融資

をしてもらえるという未来、それが考えられる妥当な線だ。
　もう少し苅部は考えてみる、すると1つの仮説が浮かんだ。オープンした彼らのショップが軌道に乗る、それも充分に考えられる線だった。もしそうなるのなら、ウチは融資をしなかったことを失敗と位置付ける結果になるだろう。馬瀬もより悲しむに違いない、また彼女のその顔を見ることになってしまう。
　そんな未来は嫌だ、そんな未来なら変えてしまいたい、そう苅部は思った。自分に問いかける、「何のための能力なんだ？」と。未来が分かるのなら、未来が変えられるのなら、またとないチャンスのはずだ。これまでのダメな自分ごと変えられる、それをしない手はないはずだろう。

　その日の仕事終わり、苅部の姿をとらえた馬瀬の瞳がわずかに見開く。なんとか残業を手際よく終わらせ、彼女の帰宅を1階のロビーで待っていた。
「苅部さん」
「すいません、ちょっといいですか？」
　驚きの表情を崩さないまま、はいと馬瀬は口だけを動かす。
「今頃こんなことを言うのはどうかと思うんですが・・・俺はあのファッションショップの件、やった方がいいと思います」
　苅部の言葉に馬瀬は驚く、ただ「そんなこと、今頃言われても」というのが現状だ。
「馬瀬さん、是非やってみたいって言ってましたよね？」
「はい」

確かに言ったけれども、もう会社としての判断は為されている。
「何か、今からでも出来ることってないでしょうか？」
「でも・・・ちゃんとした話し合いの上で決まったことですし」
いくら熱意を見せたところで、会社の意見は変わりはしないだろう。理由やら根拠が立たないかぎり、会社というものはリスクを冒さないはずだ。
「俺は今からやれることってあると思ってます、具体的に何をってなると分からないんですけど・・・・・・」
でも、とだけ言うが馬瀬は次の言葉が見つからなかった。
「やりましょう、やらないと次に進めない気がするんです」
苅部は自分に言うように言った。
眼前の彼女は困った表情を見せた、それに我に返る。
「いや、今すぐにということじゃないんで」
すいません、と言うと、苅部は会話をもどかしくしたままでその場を後にしていった。

残された馬瀬は、帰り道に苅部からの言葉を頭に思い起こす。彼の言葉と自分の気持ちを重ねて、私はどうしたいんだと問いかける。昨日は「やってみたい」と言っておきながら、実際それを訊かれると渋っている自分。それじゃ昨日と何も変わらない、自分自身を嫌だと思った昨日から。
心内がそわそわしてくる、身体内での葛藤が活発になってくる。モヤモヤしたものが体の下から込み上げる、早くどうにかしたい。次第に気持ちが変わっていく、本来あるべきものへと向かっていく。もしかしたら最初からそれは自分の中にあって、それに上塗りさ

れていたものが剥がれていっただけなのかもしれない。
ピタリと立ち止まる、覚悟を決めたように馬瀬は行き先を変えた。これでいいんだ、そう自分に言い聞かせて。
暗闇の中でおぼろげに移っていく景色の中、だんだんと足が速まっていくのが分かる。
重かった足取りが軽くなる、きっと自分の中の正解を選択することで重みが取れたのだろう。

コピーしてあった資料をもとに馬瀬はそのファッションショップを訪れる。
電気が点いている、まだ人はいるようだ。店に近づいていくと、人の声も聞こえてくる。
到着すると中の様子をうかがう、6～7人が作業をしているところだった。まだ工事も終わりきってないようで、内装は荒いままにある。
「どちら様でしょうか？」
あっ、と馬瀬は声を上げる。
中を見ていたのを気にかかった女性が声をかけてきた。不意を突かれたので、言葉が見つからず少したじろいでしまう。
「もしかして・・・・・・」
その近くにいた男性が近づいてくる、記憶にある顔だった。
「はい、そうです」
そう馬瀬が答えると、男性は「やっぱり」と口にする。その男性は昼間に会社に来ていた淡いスーツの男だった。シャツにジーンズというラフな服に着替えてたので、気づくのに時間がかかった。

「いやぁ、あなたも手伝いに来てくれたんですか？」
「えっ？」
ありがとうございます、と感謝を告げられるがさっぱりだった。
あなたも、という言葉
が引っ掛かってしまい。
頭の中をごちゃごちゃさせてると、聞き馴染みのある声を耳にする。
「すいません、ちょっとここ聞きたいんですけど」
声の主はすぐ分かった、こちらにやってくる姿を目にするとそれが正解だったことも分
かった。
そこにいたのは苅部だった、奥の部屋にいたようで最初に店内を見渡したときには気づ
けなかった。
「苅部さん・・・・・・・」
その言葉で、苅部はそこに馬瀬がいることに気づいた。
「馬瀬さん・・・・・・」
お互いがお互いの存在に驚いている、なんでここにいるんだと。
「どうしたんですか？」
苅部が先に言った。
馬瀬は本心を言うことにためらう、さっき彼の前で曖昧にしてしまったので。それを読
み取ったようにして、苅部からの言葉が来た。
「ありがとうございます、手伝いに来てくれたんですね」
そう苅部が微笑むと、彼女も自然と表情を崩した。
「私にも出来ることありますか？」
馬瀬の蛍光球の真ん中に黄が点る、素直な自分を出せたことに喜びを覚えて。

第7話

ちょうど土日を挟むため、苅部と馬瀬は翌日も翌々日もファッションショップの手伝いに訪れた。

苅部は財務部での経験を生かして資金面の調整、馬瀬はこれまでの知識を生かして店内のインテリアを主に受け持った。普段は部内でも落ちこぼれである苅部と秘書の仕事を全うしている馬瀬ではあったが、専門学校を卒業したばかりのここのメンバーに比べれば明らかにその力は長けていた。

「いやぁ、本当に2人がいてくれて助かってます」

心からの言葉なのは表情で分かる、そう言ってもらえるのが2人にはなによりだった。

「いえ、会社としては何もしてあげられなかったから」

通例ならそこで全てが遮断になるだろう、ただ2人は違った。会社には関係なく、こうして個人的に手助けをしてくれている2人の心意気にショップのメンバーたちは強く心打たれていた。

せめてバイト代くらいは出させてくださいと言われたが、それは柔に断りを入れる。そういうつもりで来てるわけじゃなく、自分たちの気持ちに逆らわず前に進むことのためだったから。

ただ何もしないのは心苦しいと言われたので、じゃあと夕食をご

ちそうになった。
店の近くに焼肉店があったので、毎日作業終わりで全員でそこを訪れた。焼肉も美味しかったが、それよりもビールが格段に素晴らしかった。いつもの仕事終わりのビールより美味しく思えた、きっと心的な充実感がそうさせたのだろう。
「なんで、ウチを手伝ってくれてるんですか？」
そう訊ねられると、苅部が答える。
「馬瀬さんがね、みんなの作品を見て、是非やってみたいって言ったんだ」
その言葉に、馬瀬も続く。
「みんなの作品がキラキラして見えたの、それが私の気持ちを呼び起こしてくれて。本当は自分も持っていたはずのものなのに、忙しい毎日で忘れかけていて。だからね、みんなには感謝してるぐらいなの」
馬瀬の言葉に、ショップのメンバーたちは照れた様相をする。
その反応に、苅部と馬瀬は顔を見合わせて笑う。

その翌日からも、平日ではあったが仕事終わりで2人はショップに顔を出した。金曜日にはオープンを迎えるため、作業は佳境に入っていく。
もちろん、会社の人間の誰も苅部と馬瀬の行動に気づくことはなかった。2人だけの秘密、それがなんだか心地良かった。
「いよいよですね、ワクワクして落ち着かないなぁ」
ショップのメンバーたちは一様にそわそわしている。
オープンを明日に控えた木曜日、前夜祭と称した飲み会がショップで行われた。ライトアップされた店内は、いつ開店してもいい完成形に仕上がっていた。

ショップのメンバー
たちの慣性による内装と洋服が並び、馬瀬の選んできたインテリアの数々も店内に仄かな
インパクトを与えている。ここにいる全員が満足感を抱いている、
「どこに出しても恥ずか
しくない子供」という言葉のように。
それもあり、飲み会は大いに盛り上がった。明日のことを考えて抑えめにと分かりつつ、
それぞれが頬の色の変化を見やれるほど飲んでいた。そんな状況からか、焼肉店ではなか
ったような質問まで飛んできた。
「2人って付き合ってるんですよね？」
最初は誰のことを言ってるのか分からなかった、まさかそんなことを言われると思いも
よらなかったから。自分たちのことを言われてると分かると、苅部と馬瀬は大きく否定の
態度を見せた。唐突な予期せぬ質問に、感情が不定に揺れていく。
「えぇっ、絶対に付き合ってると思ったのに」
ショップのメンバーたちは悔しがるように落胆している。どうやら、2人のことをそう
いう目で見ていたようだ。

帰り道、最寄り駅までの道を苅部と馬瀬は静かに歩いていく。あんなことを言われてし
まったため、お互いに変に意識をしてしまう。アルコールで頬に帯びた赤みが緊張による
もののような錯覚に陥り、なんだか恥ずかしくなる。
苅部は自分のような人間とあんな噂をたてられて申し訳なく、馬瀬は自分の気持ちを突
かれたように打たれ、それぞれに考え込んでいた。

そうこうしてるうちに駅に着いた、あっという間のようで長くも感じられた。
別れ際になると苅部の方から口を開いた、ここで言わないと後々にわだかまりが残ってしまう。
「すいませんね、さっきはあんなふうに言われてしまって」
その言葉に、馬瀬はクスッと微笑む。
「なんで、苅部さんが謝るんですか？」
確かに、と苅部は気づく。
前に進まないとと意気込みながら、ネガティブな自分が顔を出していた。
「いや、自分みたいなのと勘違いされて申し訳ないなぁって」
その言葉に、馬瀬は眉を少し下げる。
「私はそんなふうに思ってませんよ、むしろ・・・・・・」
一旦、そこで構えるように息をつく。
「・・・・・・自分の心の中を見透かされたような気分でした」
その言葉に馬瀬の方を見ると、彼女はすでに苅部を見ていた。馬瀬は言おうと決心がつく、言葉を出そうとするが喉元が閉まりぎみのように時間がかかる。次の言葉までの時間、張った緊張感が2人の間を包み込む。
言わないと、そう奮い立たせて思いきった。
「・・・好きになりそうです・・・苅部さんのこと・・・」
馬瀬はすぐに合わさった目線を外す、言いようのない感覚に襲われていく。
失礼します、とだけ言って早歩きで帰っていってしまった。
苅部は彼女の後を追うことができなかった、体が金縛りにあったように固まっていたせいで。
まさかの展開だった、これは現実なのかと何度も自分に問いかけ

る。夢世界にいるような
な、想像世界にいるような、それにしても都合のいい展開だと感じた。

「うっそ、マジかよ、オイ」
一連の話を聞いた番野は大きく驚いていた。それを失礼だとは思わない、妥当なリアクションだと思う。
「いやぁ、俺の勘はすげぇな。その子の話を聞いたときはそうだろうと思ったけど、まさかお前にとはな」
苅部も彼の意見に同意する。
「どうしたらいいのかな、番ちゃん」
「どうしたらいい、じゃねぇだろうがよ。こんなビッグチャンスまたとねぇぞ、なにがなんでもモノにしろ」
まるで自分のことのように番野は興奮している。
「でもさぁ、さすがにこればっかりは自信がないよ」
「バカやろう、失敗なんか考えんな、成功することだけ考えろ」
番野の励ましは嬉しかったが、まだ馬瀬からの言葉はふわふわ浮ついていて掴むことができなかった。

「おかえり、お兄ちゃん」
「ただいま」
自宅に帰ったのは２４時の手前だった、当たり前に康恵はリビングでテレビを見ている。
会社から帰宅したら迷わず入浴、メガホン片手にテレビでナイタ

ー、自分で作った夕食
とともにビールを飲む、テレビでスポーツニュース番組を一通りチェック、ちょうど襲っ
てくる眠気につられて就寝、というのが彼女の平日の過ごし方だ。
はっきり言ってオッサンとしか例えようがない、完全に父親の血
を継いでいる。馬瀬が
こんなプライベートを送ってることはないだろう、同い年でもえら
い違いだ。
「最近遅いねぇ、頑張ってるじゃん」
「あぁ、まぁね」
康恵にはファッションショップのオープンに向けて帰りが遅くな
ってると真実を伝えて
あった。元々、苅部は嘘をつけないタイプの男だったし、康恵はそ
んな兄の下手な嘘を見
抜く女だったから。とはいっても、会社に関わりのない仕事である
ことと馬瀬と2人で動
いてることは言ってなかったが。
「でもさぁ、財務部なのにショップのオープンの準備なんてやるの
珍しいね」
「あぁ・・・人手が足りないから、って手伝いに駆り出されてるだ
けだよ」
ふぅん、と彼女は納得してくれた。
秘密というものは形すらないものなのに、こんなにも人の感情を
揺らせるものなのかと
感じた。

金曜日、ファッションショップのオープンの当日。
苅部と馬瀬は会社で仕事に励みながらも、ショップの様子が気に
かかっていた。本当な

ら2人の間で周囲には内緒で「どうなってますかね？」などといった社内メールを交わしてるところだろうが、昨日のことがあったので2人ともそれが出来ずにいた。変に互いを気にしてしまい、ちらちら相手に目線を向けながらも何も出来ず、たまに目線が合ったときも反射的に逸らしてしまっていた。

午後になると、馬瀬は社長とともに外出していく。それと同時に、苅部のパソコンの受信メールを知らせるアイコンが動いた。おそらく会社を後にする、このタイミングしかないと彼女は狙ったのだろう。

「これから外に出てきます、戻るのは17時あたりになりそうです。その後も少しやることがあるので、仕事が終わったら先にショップに行ってください」

馬瀬からの文章が来たことで、2人の間に張ってた緊張が幾分か解れた。

「分かりました、じゃあ待ってますから後から来てください」

苅部も返信を打ち、そこから仕事にグッと集中していく。なんだか、いつも以上に仕事がはかどって充実している感じがした。

仕事終わり、苅部がファッションショップを訪れると、店内には2～3人の客がいた。店内にいたメンバーに声をかけていくと、向こうも快活に挨拶をしてくれた。

「どんなぐあいですか、お客さんの入り方は？」
「ポツポツって感じですかね、ずっと今ぐらいですよ」
そうか、でも初日だからそう焦る必要もないだろう。明日からは週末になるわけだし、
そこでまた少しでも伸びてくれれば。
プルルルッ、そのとき店のレジ横にあった電話が鳴った。
「苅部さん」
と呼ばれ、誰からだと疑いつつ電話に出てみると馬瀬だった。
「もしもし、代わりました」
「あっすいません、ショップの方はどうかなと思いまして」
「ボチボチっていうところみたいです、まぁ始まったばかりですし」
そうですね、と彼女は言う。
「それで、何か用が？」
「それが今日まだまだ仕事が終わりそうになくて、多分そちらには伺えないと思います」
まだ、馬瀬は会社に残っていた。電話口から彼女の声以外の音が聞こえてこないのは、
おそらく廊下から掛けているということなのだろう。
「そうですか、大変ですね」
「いえ、今日頑張れば土日ですから」
そうですね、と言うと苅部は口角を上げる。表情は見えないが、電話越しに馬瀬も同じ
ようにしてる気がした。
「明日、私もショップの方に顔を出しますんで」
「はい、俺もそうするつもりです」
このまま、自然な流れで電話は切られるのだと思っていた。ただ、電話口から届く彼女
の様子は先を続けたいような何かを放っていると感じられた。
「あのっ」
馬瀬が言う、苅部も身を構えるようにする。

「明日よかったら、ショップに顔を出した後に映画でも行きませんか？」
「映画・・・ですか？」
「はい、実は観たいのがあるんですけど、恋愛モノなので1人で行くには忍びなくて・・・・・・」
心なしか、彼女の喋りが早口になっていた。
そして苅部の方はとなると、彼にその誘いを断る特挙した理由もなかった。自分なんかが彼女と行くことが忍びない、そうも思う。それはそうだが、番野が言っていたようにこんな千載一遇のチャンスを逃すことと比べる必要性もないことだといえた。
「はい、俺なんかでよければ」とＯＫすると、
「本当ですか？」と彼女は喜色を含ませた声で返していた。

第8話

爽やかな空気、ほんのりぬるい風、まぶしく光る太陽、そこにあるどれもが今の自分のことを差してるような気がした。
苅部は待ち合わせ場所になっていた駅前の時計台の近くにいた。休日の昼前にもなると、この場所には駅舎から流れるように出てくる人の多さが目立ちだす。彼と同じように待ち合わせに使うにも絶好の場所で、そこには離れ離れになった片割れを待ちぼうけるような人々の姿が見やれる。
かくいう自分もその1人であって、彼女がいつ来るのかと待ち侘びている。
しばらくすると、この晴れ晴れとした気候によく似合う声が聞こえてくる。
「苅部さんっ」
右肩をポンと叩かれ、振り返ると馬瀬の姿に瞳はとらわれる。
「ちょっとだけ遅れちゃいました、すいません」
「いや、全然いいんですよ」
本音でそう言った、彼女の姿を見たら多少の出来事なんか吹き飛んでしまう。馬瀬の着ていた白のワンピースと羽織っていたベビーピンクのカーディガンは、いつもの彼女の淡い色合いのスーツとの比較で結構に輝いて見えた。
「じゃあ、行きましょうか」
「はい」

そう言うと、そこからすでに視界に入っていた大型ビルの中にある映画館へ2人で向かった。
ここに来るのは、もう3回目になる。先々週、先週、そして今、同じように馬瀬と2人でここを訪れていた。先々週は馬瀬が見たいと言っていた恋愛映画、先週は苅部が見たかったアクション映画、そして今回は世間的に大作と騒がれているファンタジー映画を観ることにした。
こうして2人で映画を鑑賞し、その後にファッションショップに顔を出す。それが週末の恒例のような流れになっていたが、当然2人の心持ちは後者を理由付けにして前者を主目的にしていた。

「お前、話が違うじゃねぇか」
馬瀬がトイレに行った際、番野は苅部にお門違いの言葉をぶつける。話が違うといっても、その話は番野が勝手に自分の中で創ったものでしかない。
「話が違うって、どういうこと？」
「あんなに美人だなんて聞いてねぇぞ」
苅部と馬瀬は映画を観た後にファッションショップへ顔を出し、焼き鳥屋「どうよ」を訪れていた。
こうやって2人で会う機会が増えたことを番野は自分のことのように喜んでくれ、そういうことになったのなら是非この店に連れて来て欲しいと言っていた。苅部としては、ま

だ付き合うともいえない微妙な関係でそうするのは恥ずかしさがあったし、馬瀬のような
タイプをこういう大衆的な店に付き合わすのもどうかと思った。ただ番野のことを馬瀬に
話してみたところ、彼女も是非その店へ行ってみたいと言ってきた。
そう言うのなら連れ
て来ないわけにもいかず、彼女には不似合いともいえる友人の店を
夕食の場とした。
　そして、馬瀬の姿を初めて瞳にした番野は驚きを表面に見れるよ
うだった。苅部からの
話でレベルの高そうな女性であることは分かっていたが、あくまで
も人生で大学の学部一
のブーちゃんとしか付き合ったことのない苅部の視点での話だと高
をくくっていたから。
　目の前にいる馬瀬は「本物」だった、大学の学部どころか大学一
になれるほどの美人だ
った。苅部の話を半分にしか捉えていなかった番野は、結果苅部に
だまされたような気に
なってしまっていたのだった。
「言ったじゃんか、とっても綺麗な人だって」
「そうはいっても・・・なぁ？」
　学部一のブーちゃんのときも釣り合いが取れてるとは言いがたか
ったけれど。
「なぁ、って何さ？」
「いやぁ、お前にはちょっと勿体無くねぇか」
　友人としていじめてるわけじゃなく、世間一般論として。
「そりゃあ・・・まぁ、そうなんだけど。でも番ちゃん、応援して
くれてるじゃん」
　まぁな、と番野は言いつつ首をクッと傾げる。
「何を話してるんですか？」

そこに、戻って来た馬瀬が割って入った。
「いや、特に何も」
そう苅部がかぶりを振ると、馬瀬は2人を交互に見て言う。
「嘘だ、私のこと何か言ってたんでしょ？」
本人たちに意識はなかったが、どことなく変な雰囲気を醸していたようだ。そこに気づいた彼女が詰める、どうしようかと思ってるうちに番野が口を開く。
「いやさぁ、こいつには遥ちゃんみたいな子は似合わないんじゃねぇかって言ってたんだよ」
「どうしてですか？」
その返答に、番野は少し考えて言う。
「どっちかっていうと、遥ちゃんはこいつよりエリートっぽいやつの方が似合う気がするんだよね」
確かに、そう苅部は心の中で言った。
「でも、そういう人って一緒にいると疲れそうじゃないですか？仕事で結構緊迫感ある中にいるのに、プライベートまでそんな空気になりたくないんです」
なるほど、また苅部は心の中で言った。
「つまり、こいつといると緊迫感がない、と」
「いえ、そういう意味じゃなくって」
番野の裏をとった言葉に、馬瀬は反射的に首を大きく振る。
「じゃ、なんでこいつなの？」
なんとなく失礼な気はしたが、苅部自身も気になるところだった。
馬瀬は一度チラッと苅部を見て、それを元に戻して答える。
「苅部さんといるとホッとするんです、一緒にいると気が落ち着けて和むんです」
心臓をユラリと撫でられるような感覚になった、これまでに味わったことのない大きな

悦楽。そんな言葉など今まで言われたことなんかなく、なにか勇壮な感情も芽生えた。
番野もその言葉で納得したようで、そこからは変に2人に首をつっこむこともしなかった。

「お兄ちゃん、やったじゃん！」
馬瀬を最寄り駅まで送っていき、家に戻ると康恵は芯から出したような言葉で言った。
まさか、毎日近くで見てきた冴えない兄に、あんな綺麗な女性がきてくれるなんて微塵も思っていなかった。兄に対して失礼な見解ではあるが、彼女自身はとてつもなく嬉しいのである。
「絶対に離しちゃダメだからね、もう二度とあんな人は現れないよ！」
釘を打つように言われるが、そんなこと本人が誰よりも承知している。
「分かったから、そんな言うなって」
実は、さっきまでここに馬瀬の姿があった。
番野と別れて焼き鳥屋「どうよ」を後にすると、2人は苅部の自宅を訪れることになった。店から近いこともあり、康恵が馬瀬に会いたがってることをそれとなく言うと、彼女の方から行ってみたいと言ってきた。
康恵が馬瀬のことを知っていたのは、番野が口をすべらせたからだ。口を閉めきれないタイプなのは知っていたが、逆の意味で彼は期待を裏切らなかった。そのうち、波状的に

ここら一帯の人たちに知れ渡ってしまうんじゃないかと危惧するほどに。
なんにしても、今回はそれが良いように働いてくれたのは事実だった。彼の口がすべりやすいおかげで、彼女が家にまで来ることになったわけだし。
少々の展開の早さは否めなかったが、康恵がいる分だけ馬瀬も気を楽にすることができる。
「お兄ちゃん、おかえり」
そう言いながら2人を瞳にした康恵は、瞳を点にさせた。
「おじゃまします、馬瀬と言います」
その言葉に、風呂上りの通例のようにラフな格好でナイターを見ていた彼女は跳ねるように立ち上がって
「あっ、はじめまして、苅部康恵です」
と、挨拶をした。
ここからは意外だった、康恵と馬瀬は思いのほかに話が弾んでいたから。意外といっても、同い年ということで話は合いやすいのだろうが。
3人での時間は一向に時の流れを感じさせず、気づくともう深い時間に差し掛かろうとしていた。馬瀬をここに連れて来たのは正解だった、初対面の女性同士はあっさりと友達のようになっていた。
「また来てね」と康恵は玄関口で手を振り、
「はい、また来ます」と馬瀬は軽く会釈をして帰路についた。

順調だったのは2人の関係だけではなく、ファッションショップの方もだった。

なんと、ショップがテレビで紹介されることになった。タレントやアイドルが毎週１つの街を歩いて気になる店を訪れていく、という実に簡単な番組だ。ただこういう簡単なものにこそ人々は感情が入りやすく、年齢層を問わず好感度の高い番組だった。

この吉報を知らせると、ショップのメンバーは一様に喜びを見せた。自分たちが創り上げた店が全国に伝わる、そう思うだけで心は躍るようになる。

「ありがとうございます、本当に何から何までお世話になって」

「いえいえ、私は自分の好きなお店をオススメしただけですから」

馬瀬は謙遜するように言う。

今回の件は馬瀬のお手柄だった、彼女の手づるが全てだったから。彼女の大学時代の友人が番組に関わっており、馬瀬も以前からその友人にショップをＰＲしていたことが実になった。

にもかかわらず本当に彼女の言葉には嫌味がない、持ち上げてくれる周囲におごることもない。そんな彼女が自分に気を向けてくれてるという現実を苅部は未だに疑問に思ったりしてしまう。

そういう苅部も微小ずつではあるが、変わろうとしていた。周囲の人間の感情を読み取れるという能力を活かし、それを有効活用できるよう心掛ける。

あれから調査を重ねていき、ある程度の蛍光球については意味を知ることができた。金の色の示す感情は興味、番野が苅部の能力について聞いているときに点っていたのも納得

できる。銀の色は疑い、康恵が刑事モノのドラマを見てるときに点っていた。銅の色は驚き、ファッションショップのメンバーが今回のテレビ取材の件を耳にしたときに点っていた。茶の色は焦り、時間に追われている様子の小走りのサラリーマンたちに多く点っている。オレンジの色は好意、馬瀬が苅部と接しているときに点っている。紫の色は悪意、先輩たちが苅部に強くあたったりするときに点っていた。黄緑の色は心配、営業部の人たちが大事な取引に出掛ける前に点っていることが多い。水色の色は悔しい、以前のミスの多かった自分自身に点っている色だった。

などなど、街中ですれ違う数多の人間に目を向け、初めて目にする色を見つけると後をつけていき、その色がどういう意味であるかを調べていく。そうやって己に備わった能力を徐々に自分のものにしていき、同時に自信も身につけていく。

他人の感情を読める、それは他には誰しも持たないものであり、それが苅部に優越感に近い余裕をもたらす。これまで彼に足りなかったものが一つ一つ築かれていく、その成長は自分自身にとって楽しいものだった。

そして、あとはそれを結果につなげていけばいい。青や緑や黒など、悪しとされる色を点してる人間には極力の接触を避ける。下手に近づいたところで、以前の苅部のように嫌悪を抱かれるだけだ。もしも相手側から接触をしてきた場合、なるべく彼らの怒りの線を踏まないように気をつける。黄やオレンジなど、良しとされる色を

点してる人間にはどん
どんと接触を図る。彼らは大概のことでは気分を害したりはしない、
苅部に対してでも優
しくしてくれる。自分自身がそういうところにいれば、自然と他人
にもそうできるものだ。
そういうふうにして、要領よく苅部は毎日を過ごせるようになっ
てきた。
同一人物に対しても、悪しとされるときは近づかず、良しとされ
るときに近づく。
苅部本人に急にそこまでの大きな変化が為せるわけじゃなかった
が、接する人たちの心
持ち一つで彼への印象は大きく変わっていこうとしていた。
要はタイミングだ、知力や体力で衰える分を運でカバーすればい
い。運といっても、他
人からしてみればということであり、苅部は計画的に自分の運を作
ることができる。
彼はこれまでの人生のマイナスをプラスへと変えていった。

第9話

あれから1ヶ月が過ぎようとしていただろうか、苅部の周辺は大きく変化していった。
この1ヶ月はあっという間に思えた、それだけ充実していたから。時の流れなど気にかけることもないほど、毎日は面白く感じられた。人生ってこんなに良いものなのか、苅部は生まれて初めてというぐらい心底思った。

その一つ一つを辿っていくなら、まずはファッションショップのことになる。
テレビのロケの当日、苅部と馬瀬もショップを訪れていた。手に汗を握る緊張感に苛まれるショップのメンバーたちへリラックスするよう声を掛け、撮影もなんとか予定通りに滞りなく済ませることが出来た。
その後の反響といえば、メンバーたちの予想以上のものだった。放送の後は結構な数の若者がショップを訪れ、売上も上々なものになる。
馬瀬の見る目は正解だった、彼女が見込んだメンバーたちの作品はどれも好評だった。
質がいいんだ、あとは多くの人たちに触れる機会さえあればという彼女の考えは、今回の一件によって確信へと変わる結果になった。
今回のテレビ出演に際して、ショップのホームページも開設していたため、遠方の人た

ちにもショップに触れてもらうことが出来た。
これに関しては、苅部の活躍が光った。ショップのページを作成することは可能でも、
メンバーたちにネットショップのノウハウはなかったから。一応にも財務部のはしくれで
ある苅部にはその知識は備わっており、彼によって諸所の流通経路を繋ぐことに成功した。
大成功だった、彼らを取り巻く環境はブレイクした歌手並みに変貌をとげていった。
同時に、苅部と馬瀬にとってもそれは同意のこととなる。
ショップへの客足の増加はイコールとして2人の環境の変化に比例していく。ポップな
店内に馴染んだ馬瀬の選んだインテリアは好評になり、
「あれは売り物なんですか？」
「あれはどこで売ってるんですか？」
という声も少なからずあった。
その声に伴い、ショップのホームページに専用のコーナーが設けられることになったの
だ。店内のインテリアについての説明とか、どこの物であるとか、どうやって手に入れら
れるとか。
馬瀬にとっても想定外の展開だったが、その専用のコーナーは彼女が担当することにな
った。
そして、これについては会社を通すという問題も生じることになる。これまでは2人が
個人個人として会社に関係なくやってきたことだったが、今回のことにはショップからも
ビジネスとしての契約をと依頼されたからだ。ここまで、ショップのために無償で動いて

くれた2人にメンバーたちも恩返しがしたいと思ってくれていた。
　きちんと会社の名前を出した契約にしたいと言ってくれたことには、2人も嬉しかった。
障害も特にはない、こんなうまい話に会社が飛び掛からないはずはない。唯一のネックといえば、一度は契約を断った相手先に対しての契約ということの申し訳なさだったが、相手方がそれを依頼してきてくれてるわけだし、なにより好条件しかない契約に考えをあぐねるようなプライドは会社には命取りでしかない。こんな良い契約が向こうから転がって来てくれたんだから、素直にＧＯと言えばいい。
　実際に苅部と馬瀬が今回の契約について話をすると、社長は驚きの表情を見せた。当然だろう、秘書と部下が会社に内緒で断りをいれた相手先の力になっていたんだから。だが、社長に2人をああだこうだと厳重に責めることはできなかった。結果として2人が大きな手柄を持って来てくれたのだから、社長は首を縦に動かすのみだ。
　こうして契約を無事に交わすことになり、会社としてショップと交わりをもつことになった。
　ショップの反映はその後も続き、流動的に会社の名前も知れ渡っていく。馬瀬1人が担当していたショップのインテリアも会社単位の仕事として受け持つことになり、彼女はこの件についてはアドバイザー的な役回りにまわることになる。会社が担当する契約になったのなら、秘書である馬瀬が全てを任せられるというのは無理だった。それでも彼女はよ

かった、アドバイザーとしてだとしても念願だった実質的なインテリア業務に携われるのだから。

次に、苅部と馬瀬の関係も進展が見られることになる。

これまでは会社帰りに相談と称して食事に行ったり、休日にファッションショップへの顔出しと称して映画を観たり、なにかしら都合のいい口実をかこつけて2人きりになるシーンを作ってきた。

馬瀬からは「好きになりそうです」という言葉をいつかにもらっていたが、それについて苅部が特定の返答をすることもなかったので具体的な進展もなかった。

とはいっても、2人の間では互いの気持ちはある程度は汲み取れている。あとはお互いの歩み寄り、それだけだった。

だが、これにも馬瀬の「都合のいい口実」にかこつける術が働いた。というより、「都合のいい口実」にかけつけるための外堀を埋める作業をしておく前段階をしてあったのだけれど。

「今日は定刻で終われそうです、今から楽しみです」

馬瀬からの社内メールが届くと、苅部も返信する。

「こっちも終われると思います、俺も楽しみにしてます」

返信メールが届くと、2人は遠くから顔を見合わせて綻ばせる。

この日は、馬瀬が苅部の家を訪れて料理を作ることになっていた。3日前に夕食を一緒
に食べているときに好きな料理の話になり、苅部の第一の好物がチャーハンだということ
を聞くと、
「私、チャーハン大得意なんです！」
と、馬瀬が何かをアピールするように強めに言った。
こうなれば、あとの展開は流動的に開けてくる。
「へぇ、それは食べてみたいですね」と苅部が言い、
「いつでも作りますよ、絶対に美味しいって言わせてみせますから」
と馬瀬が言う。
そこからすぐ具体的な話にいく例は少ないだろうという中、馬瀬は
「今度作りに行ってもいいですか？　康恵ちゃんにもまた会いたいし」
と、康恵を中間に挟んで苅部の家に行く約束を交わすことに成功する。
本当はチャーハンが得意というわけじゃない、口から咄嗟に「大得意」なんて出してし
まっていた。そのせいで、それから3日間は料理上手な友人にコツを習ったり、料理本を
買って練習をするハメになる。
その成果もあって、苅部からは「本当に美味しいです、お店で食べてるみたいです」、康
恵からは「遥ちゃん、これ作り方教えてよ」と、彼女のチャーハンは好評を得ることがで
きたわけだが。
「よかったです、美味しいって言ってもらえて」
と、馬瀬はホッと安堵の表情になる。
テーブルを囲む和やかな空気、一人暮らしの馬瀬には滅多に味わえない環境だった。

夜も更けてきて、終電に間に合うように帰路につく馬瀬を駅まで苅部が送る。
「今日はありがとうございました、とっても美味しかったです」
「いえ、全然そんな大したことしてませんから」
そう言いながらも、馬瀬の心の中は褒めてもらえてることに嬉しさを覚える。そして、
彼女の感情は頭の上に点る黄の蛍光球で苅部に伝わっていた。
「料理、上手なんですね」
「いや、普段はあまり作ったりしないんです。自分のためだけに作るのって、なんか億劫
になっちゃうもので。時間があるときじゃなければ、大体は外食で済ませちゃいます」
「へぇ、とてもそういうようには思えませんでしたよ」
「なんでしょう、食べてくれる人がいると張り切っちゃうんです」
見返りがあると人は頑張れるものだ。彼女にとっての見返りは、苅部が美味しく食べて
くれることと和やかな食卓の空気だった。
幸せな時間、そう素直に思えた。ここにいられれば、きっと自分も幸せになれると。
「苅部さん」
呼び掛けると、苅部は振り向く。
「前に言ったこと、訂正したいんですけど」
前に言ったこと?、何だったかと少し考える。回答に行き着くことはできない、彼女の
言葉が漠然としたものだったから。それは本人も分かってる、間はさほど開かずに回答が
出る。
「苅部さんのことが好きになりそう、って言ったことを」
すぐに思いつく、そのときの状況は。苅部にとって印象的すぎる

言葉だったから、鮮明
にはっきりと憶えている。その言葉の訂正、どういうことだと考え
がつかないうちに馬瀬
の言葉が届けられる。
「もう、好きになっちゃいました」
馬瀬は笑顔になった、ためらいはどこかに吹き飛ばしたように清
々としていた。頭上の
蛍光球はオレンジを点している、好意を示す色合い。彼女の言葉は
本物だ、笑顔も本物だ、
その気持ちに嘘偽りはない。
ならば戸惑う必要はない、こちらも素直になればいい。自分の頭
上にもオレンジの蛍光
球があるはずだ、それをままに伝えればいい。
「俺も好きです、馬瀬さんのこと」
眼前の彼女は目を丸くするようにし、微笑み、気持ちうつむく。
それを上げると2人の目線が合い、また気持ちうつむいてしまう。
「なんか・・・恥ずかしいですね」
告白した互いの顔を合わせるのに羞恥心を感じるように距離を縮
めていく。何も言葉は
浮かばなかった、それを気持ちで埋めるように唇を合わせた。最初
から展開が決まってい
たかのように自然にそうしていた。
体を離すと再び恥ずかしみが上がってきたが、同時に体の中は温
かかった。幸せの温度
を感じながら、会話をすることもなく2人は歩を進ませていった。

翌日の朝、会社へ向かう苅部の足取りはいつになく軽かった。仕
事に行くのがこんなに
も楽しくなるなんて、以前は予想だにしなかったことだ。

起きたときに鏡に映る自分には未来の蛍光球が赤に点っていた。初めて目にする色だったが、おそらく今の幸せな感情にまつわることなのだろうと然して気にかけることもなかった。

そして、周りの緑の蛍光球を点すサラリーマンたちに申し訳なく思うほど、彼の心は躍っていた。馬瀬とは想いが通じた、康恵も彼女を気に入ってくれている、ファッションショップは好評を続けていて、会社での仕事も順調といえる。苅部に関わる全てのことが良い方向へと向かっていた。これまでの人生のマイナスの分が、この能力とともに自分をプラスへ変えてくれた。

一体、誰がこんな大逆転といえる展開を用意してくれたのかは分からないが感謝したい。今までは神様なんていない、世の中は不公平でしかないとくすぶっていたが違った。今なら神様だろうと、ＵＦＯを目撃したという誰かの証言だろうと信じれそうだ。これからは明色に彩る人生が待っているんだ、そう思うと目の前の道がどんどんと開けていくようだった。

瞳に映る全てのものが明瞭に思っていると、視界にあるものが入りこむ。前方から歩いてくる１人のサラリーマン、その頭上に赤の蛍光球が浮かんでいた。自分にも点っていた新色、彼もまた喜色の過ぎるような事柄があったのだろうか。その新色の意味合いに興味が湧いたが、会社までに時間もなかったのでスルーすることに決め

た。
　その彼とすれ違ってからそう経たないうちのことだった、耳に大きな衝撃音が響いた。
後ろを振り返ると、遠くの方に人だかりが出来ている。何が起こったのかは予想がつく、
衝撃音の前の大きなブレーキの音で。
　人だかりの方へ行くと、その中央には大型トラックと倒れている人間が見えた。やはり
交通事故か、可哀相にと野次馬の一部になっていた苅部は思う。他人事としての感情だっ
た、ただそれは他人事では終わらなかった。よく見てみると、そこに倒れていたのは先程
のサラリーマンだった。さっき赤の蛍光球を点していたサラリーマン、間違いない。
　まさか・・・そう考えると、頭の中が真っ白になった。寒気が体に走る、嫌な予感は身
体中に広がっていった。

第９話（後書き）

今作は次回更新の第１０話で最終話となります。

第１０話

その日の仕事は全くといっていいほど、手につかなかった。朝起こった交通事故は、苅部の瞳には惨劇のように映っていた。未来の蛍光球に赤色を点していたサラリーマンがあんなことになり、普通でいられるわけがない。自分の頭の上の未来の蛍光球が赤であること、それが意味することを考えるとマイナスにしか物事を考えられなくなる。

僅かな望みを託して、さっき会社のトイレに行って鏡を見てみたが希望は一瞬にして打ち砕かれた。自分も近い未来にあのサラリーマンのようになるのか、そう思うと頭がパニックを起こしそうになる。赤色の未来に待ち受けるもの、その正体を知りたくてたまらなくなり、同時に知ってしまったときのショックに目と耳をふさぎたくもなった。

「・・・・・・さん、苅部さん」

ふと自分の名前が呼ばれていることに気づく。現実世界から逃避するように思考を続けていて、周囲に気を向ける余裕がなかった。

「はい、なんでしょう」

弱々しい声で、隣のデスクの女性社員に返答する。

「顔色悪いですよ、大丈夫ですか？」

なんとなく耳に入ってきた程度だった、正直今は身体の活動は正常には働いてくれてな

い。自分の顔色が悪いということも、彼女に言われて初めて認識した。
「汗も出てますよ、早引きした方がいいんじゃないですか？」
それも言われて初めて気づいた、額にはいつのまにか冷や汗が滲んでいる。目先にあるかもしれない惨劇を思うと、身体が異常反応を示していた。
具合が悪いわけではなかったが、体調不良という理由付けで会社を早退した。

会社を後にしてからも、苅部は己を正常に保つことが出来なかった。まるで当て所のない旅に出てるように、お先は真っ暗だった。街灯の光もない黒の道を命綱なしで歩いてるような、一歩でも踏み外せば崖から落下していくような感覚だった。
そんな停滞のない暗闇に入り込んで15分ほどが過ぎた頃、携帯が揺れる感覚が伝わる。
「体調、大丈夫ですか？　さっき会議が終わったんですけど、苅部さんがデスクにいなかったから気になって。そしたら体調不良で早退したって聞いて、心配で・・・・・・。もしかして、昨日も体調悪かったんじゃないかって思って・・・・・・」
馬瀬からのメールだった。自分の偽りの体調不良を心配してくれている、申し訳なく感じた。
いつもなら喜んでいるはずのメールだったが、今はそれどころじゃなかった。適当に返信のメールを送り、苅部は先を歩いていく。
もう15分ほど歩くと目的地に着く、正確に言うなら目的地なのかどうかの確証はなか

った。
建っているだけで威厳に満ちてるような外観の大病院、今の彼にそれを感じてる余裕はないが。ここを訪れたのは自分の診察をしてもらうためじゃなく、朝の交通事故に遭ったサラリーマンがどうなったのかを知るために。事故が起こった場所から1番近い病院に搬送されてるだろうと、ここを訪れた。
彼の予想は当たった、あのサラリーマンはこの病院にいた。しかし、まだ手術中ということで詳細を知ることは出来なかった。
彼の結果がイコールで自分の未来、いつしかそう思うようになっていた。手術の終了時間は未定と聞き、苅部はそこに留まることを諦める。あれだけの大事故だ、只事では済まないはずだ。重傷、重体、最悪は・・・そう考えると、頭を何度も振った。
手術の結果を聞くのが怖かった、もしもを考えると聞けなかった。その結果を知ってしまったら、自分の未来には絶望しかなくなる。そうなってしまうのが怖くてたまらない、逃げるように苅部は病院を後にした。

それからの帰り道は困難を極めた、一瞬の油断も許されなくて。どこにどんな事故の可能性が潜んでるか分からない、そう思うと何もかもが危険に見えてくる。周りにいる全ての人間が敵に見え、全ての物が襲い掛かってくるような気になる。
なるべく危険性の低い、道の端に寄って少しずつ進んでいく。前後を何回、何十回、何

百回、気が遠くなるほどに細心の注意をはらいながら振り返る。近くにいる人たちにどう
思われようが気にしない、気にしてる余裕がない。
そんなふうにして、1時間の道のりに2時間をかけて家まで辿り着いた。
それからは毛布を被って、ただひたすら過ぎてく時間を遣り過ごすだけだった。体はい
つまでも震えていた、何が起こるかも分からない事に怯えていた。
もちろん、自分の部屋
にいたところで助かる保障なんかない。それでも、今は微小でもいいから安全性のあると
ころにいたかった。安全という言葉のブランドにすがりつきたい気持ちでいっぱいだった。
そんな心持ちを5時間も続けてると神経が参りそうになった。
ガチャッという物音に体がビクリと過剰に反応する、ただ康恵が帰ってきただけだった。
「お兄ちゃん、どうしたの？」
体調が悪いと偽りの理由を康恵にも言う。心配してくれたがそれどころじゃなく、適当
に返事をしていた。
このまま、時間が過ぎていくのを待つしかなかった。ここにいれば、大地震で家が崩壊
したり、強盗犯が侵入したりでもしなければ、なんとかなると自分に言い聞かせながら。

また2時間ほどが経った頃、康恵の声が聞こえてきた。
「お兄ちゃん、遥ちゃんが来てくれてるよ」
馬瀬が？
「ここ、入るからね」
こちらの返答を待つこともなく、この部屋の戸が開けられる。暗

闇だった部屋の明かり
もつけられ、いくつかの足音が耳に入ってくる。
「お兄ちゃん、薬買って来るからね」
そう言って、康恵はそそくさと出て行った。自分と馬瀬に気を遣ったのだろうことは分
かった。
「苅部さん、大丈夫ですか？」
馬瀬の声が届く、気持ち程度だが強張る心内の和らぎを感じた。
同時に気づく、ここにいさせては馬瀬や康恵も危険なのではないかと。
「はい、ちょっと気分が悪くなっただけですから」
まずい、このまま彼女と近くにいたら。
「そうですか、なら安心しました」
まずい、なんとかしないと。
「何回かメールしたんですけど、返信がなかったから心配になって来ちゃいました」
嬉しいはずの言葉に嬉しさが湧かない、そんな余裕が全くなかった。早くここから馬瀬
を出さないと、彼女まで巻き添えになってしまうかもしれない。自分が出ていくことも考
えたが、この状況では不自然に違いないし、なにより外出を止められることだろう。
「何も食べてないって康恵ちゃんから聞いたんですけど、軽いものなら作ったら食べてく
れますか？」
どう返事していいか迷った、「はい」と言ったら彼女が長居してしまうし、「いいえ」と
言うのは失礼に思って。
だが、この状況下において、迷いは命取りになりかねない。
「・・・すいません、食欲がないんです・・・」

申し訳なさでいっぱいになる、折角の好意に対して。
少しの間があり、馬瀬が言う。
「じゃあ、何か作っておきますから、食欲が出てきたら食べてください」
違う、そうじゃないんだ。
食欲の問題じゃない、ここにいない方がいいんだ。
彼女の生命の危険に関わる、そう自分の決意に火をつける。
「・・・帰ってもらっていいですか・・・」
「・・・えっ？・・・」
苅部の声は震えるようだった、彼が言うには勇気のいる言葉だった。
「・・・馬瀬さんに具合悪いのがうつるといけないし、明日も会社あるから・・・」
「・・・このぐらい大丈夫ですよ、遠慮しないでください・・・」
ダメだ、もっと強く言わないと。
これは彼女のためなんだ、彼女を救うためのことなんだ。
「・・・帰った方がいい！・・・」
「・・・でも・・・」
苅部の強い言葉に、馬瀬の言葉が弱くなっていくのが分かった。
「・・・帰ってください！・・・」
振り絞るぐらいの声で言った、自分が嫌なやつに思えて仕方なかった。
そこからの空白は僅かなものだったが、彼女のことを思うとやりきれなくなった。
「・・・私じゃあ・・・力になれませんか？・・・」
細い声だった、馬瀬の心情がそこにままに出ていた。
苅部はだんまりを決め込む、やがて馬瀬は何も言わずに帰っていく。さすがに良心の呵
責に苦しみ、布団を取って彼女の後ろ姿を目にする。
ハッとした、まさかの状況がそこにあったから。

去っていく馬瀬に点っていた未来の蛍光球が赤になっていた。どういうことだ、どうして彼女に赤が・・・・・・。あまりにもの展開に頭がパニックになる、整理しようにも縦横無尽に飛び回る疑問符を容易につかむことが出来ない。

ただ、あれこれ悩んでる時間はなかった。馬瀬が危ない、この状況で外を歩かせるのは危険すぎる。

まだ感情のまとまらない心内のまま、苅部は外に飛び出る。とにかく彼女を探さないと、その意思だけで足を走らせていく。

馬瀬はすぐに見つかった、家から2分ほどのところにある交差点付近を歩いている。彼女の姿を視界にとらえ、苅部はスッと胸を落ち着ける。よかった、そう思ったのは束の間だった。

馬瀬が赤信号の交差点に入っていこうとしているのが分かった。どうして・・・どうして、止まろうとしないんだ。

苅部は全速力で交差点に走っていく、身体が自然とそうしていた。夜風を切るような走りだった、運動音痴とは思えない疾走感を出して。

右からワゴン車が迫っている、馬瀬は下を向いたままで気づいていない。彼女の体が交差点に入る、ワゴン車はすぐそこまで来ている。

キキ～ッ、けたたましいブレーキの音が鳴り響く。その音でようやく彼女は現実に戻る、しかし今頃そうなったところで遅かった。

瞬間、世界がスローモーションになる。全ての動きが水中を泳い

でるように、ゆっくり
と流れるように為されていく。これが映画のワンシーンだとしたら、きっとＢＧＭには優
美なオーケストラが流れていることだろう。
我に返った馬瀬はカーライトの強い光を浴びながら、金縛りにあっているように立ちす
くんでいる。
ワゴン車を運転していた男性は急ブレーキをかけながら、神に祈るように両目をつむっ
ている。
苅部の手が馬瀬に伸びる、ワゴン車も確実に彼女に近づいていく。ビーチフラッグのよ
うな感覚、どちらが馬瀬に早く届くか。
苅部の手が先に馬瀬に届く、そして体ごと抱えて思いきり前に突っこむ。
間一髪だった、自分以上の力を出した苅部は間に合うことが出来た。
目を開く、意識がある、体が動く、助かったんだと分かった。
抱えていた馬瀬も同様だった、それにようやく息をつくことが出来た。
「・・・よかった・・・」
心の底から出た言葉だった。
「・・・苅部さん・・・」
馬瀬が言う。まだ金縛りのような緊張感が持続してるのか、身体は硬くなっている。
「・・・無事でホントによかった・・・」
そう言い、馬瀬の体を引き寄せる。
もしかしたら彼女を失っていたかもしれない、そう思うと愛しさが溢れてきた。馬瀬も
ゆっくり苅部の背中に腕をまわす、次第に涙で鼻をすする音が聞こ

えてきた。
「・・・怖かった・・・怖かったです・・・」
かすれるほどの涙声だった、感情の昂ぶりを示すように背中にあった彼女の腕に力が込められる。

苅部と馬瀬の未来の蛍光球は銅に変わっていた、自身と恋先の未来を変えることが出来たのだ。
もう大丈夫だろう、彼はきっと強く生きていけるはずだ。

第１０話（後書き）

今作はこれで最終話となります。
最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7974e/

カラーボールライフ

2011年4月13日09時10分発行